

大地に根を張り、千の葉を未来へ

千葉大学サステナビリティレポート

Chiba University Sustainability Report

2025

目次

はじめに

- 01 千葉大学憲章
千葉大学ビジョン「YOKOTE VISION」
- 02 学長からのメッセージ
- 03 大学概要
- 04 Topics 環境
- 06 Topics 社会
- 07 Topics パートナーシップ
- 08 千葉大学環境・エネルギー方針
千葉大学の RE100 長期ビジョン
- 09 環境マネジメントシステム（EMS）の運用

サステナビリティに関する教育・研究

- 11 学部長・センター長に聞く！
- 12 学部・大学院・附属学校での環境教育
- 14 国際的なサステナビリティ教育
- 15 サステナビリティに関する最先端の研究

環境的側面によるサステナブルな取り組み

- 16 脱炭素キャンパスを目指す取り組み～カーボンニュートラル～
- 18 循環型キャンパスを目指す取り組み～サーキュラーエコノミー～
- 21 自然共生キャンパスを目指す取り組み～ネイチャーポジティブ～
- 23 安心安全なキャンパスを目指す取り組み

社会的側面によるサステナブルな取り組み

- 24 大学による社会的な取り組み
- 26 学生活動を通じた社会的な取り組み

パートナーシップによるサステナブルな取り組み

- 28 大学を支える事業者の取り組み
- 29 企業や団体とのパートナーシップによる取り組み

環境マネジメントシステムの運用状況

- 33 法規制等の遵守状況・物質収支
- 34 環境 ISO 内部監査の実施と結果
- 36 環境目的・目標と達成度評価一覧
- 38 環境会計

おわりに

- 39 環境ガイドライン対応表
- 40 外部の方々との意見交換会
- 41 編集後記

編集長より：千葉大学環境 ISO 学生委員会 蛭田愛海（法政経学部3年）

「サステナビリティレポート 2025」をご覧ください誠にありがとうございます。本レポートでは千葉大学のサステナビリティへの取り組みを「環境」「社会」「パートナーシップ」という3つの構成でご紹介し、大学の姿勢を体系的にご理解いただけるよう工夫しました。また、本レポートの執筆・編集は、教育活動の一環として環境 ISO 学生委員会の学生が主体となって担っています。学生のコメントを随所に掲載し、主体的な関与をより明確に打ち出しました。このレポートを通じて、千葉大学の取り組みを起点に、社会全体で持続可能な未来を築いていく流れを加速させる一端となることを願っています。



本レポートについて

報告対象者：

本学学生・教職員・地域住民・高校生・他大学・企業・行政機関

作成方針：

環境への配慮、わかりやすい表現、簡潔な文章、千葉大学のサステナビリティへの対応の明確化

参考ガイドライン：

環境省「環境報告ガイドライン 2018 年版」

報告対象範囲：

活動：千葉大学における教育・研究・診療・社会貢献活動、及び千葉大学が業務を委託した業者のキャンパス内における事業活動

期間：2024 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日 ※対象期間を超えて報告する場合はその旨を明記

※環境パフォーマンス詳細データおよび環境意識アンケートの詳細結果については大学 Web サイトに掲載
Web サイト：<https://www.chiba-u.ac.jp/general/approach/environment/>



千葉大学憲章

千葉大学では、「つねに、より高きものをめざして」という理念を念頭に置きながら、地域、日本、さらには世界に貢献できる大学を目指して努力を重ねています。

千葉大学の理念

“つねに、より高きものをめざして”

千葉大学は、世界を先導する創造的な教育・研究活動を通しての社会貢献を使命とし、生命のいっそうの輝きをめざす未来志向型大学として、たゆみない挑戦を続けます。

千葉大学の目標

私たち役員と教職員は、上記の理念のもと、自由・自立の精神を堅持して、地球規模的な視点から常に社会とかかわりあいを持ち、普遍的な教養（真善美）、専門的な知識・技術・技能および高い問題解決能力をそなえた人材の育成、ならびに現代の課題に応える創造的、独創的研究の展開によって、人類の平和と福祉ならびに自然との共生に貢献します。

1. 私たちは、学生が個々の能力を発揮して「学ぶ喜び」を見だし、鋭い知性と豊かな人間性を育てていく自律成長を支援するために、最高の教育プログラムと環境を提供します。千葉大学は、学生と私たちがともに学ぶ喜びを生きがいと感じ、ともに成長していく知的共同体です。
2. 私たちは、学生とともに、社会で生じるさまざまな問題の本質を、事実を踏まえて深く考察し、公正かつ誠実な問題解決に資する成果を速やかに提供して、社会と文化ならびに科学と技術の発展に貢献します。
3. 私たちは、総合大学としての多様性と学際性を生かし、国内外の地域社会・民間・行政・教育研究諸機関と連携して、領域横断的研究と社会貢献を積極的に推進します。
4. 私たちは、各人の個性・能力・意欲および自主性が継続的に最大限発揮され、意欲ある人材が積極的に登用される仕組みと環境を構築し、時代の変化に応じて柔軟に大学を経営します。

2005年10月11日制定

千葉大学ビジョン「YOKOTE VISION」

千葉大学は2025年4月、大学の新たな中長期的な方向性や目指す姿である「YOKOTE VISION」を策定しました。「生命、環境、そして社会へ。知の共鳴で未来を拓く千葉大学」を主題に掲げ、「研究」「教育」「社会貢献」「経営」「信頼」の5つの柱を基盤としています。

YOKOTE VISION



生命、環境、そして社会へ。
知の共鳴で未来を拓く千葉大学



[ビジョン実現に向けた行動指針]

1 「より良く生きる」に貢献しよう

- 「生命/いのち」「環境」「社会」をキーワードに、自身の専門性を活かして、変化を恐れず、新たな領域の開拓にチャレンジする。
- 地域社会やグローバル社会に活動の成果を還元し、個性や才能を発揮して活躍する人材を輩出することで、人々の「より良く生きる」に貢献する。

2 イノベーションを楽しもう

- 企業・団体・地域・世界の人々との共創を先導し、互いの知を高め合いながら、進取の精神でイノベーションを創出する。
- 学内においても、異なる視点や強みを尊重しつつ、専門性や職種の種類を超えて、対話と協働を促進していく。

3 大学の基盤を強化しよう

- 多様なステークホルダーの声を活かし、経営体制を強化する。
- 学生・教職員が生き生きと活躍できる環境を整備する。
- 大学のリソースを最大限活用し、世界に存在意義を示す。
- 社会に開かれた大学として、千葉大学ブランドの向上に努める。

ビジョンの詳細はこちら



学長からのメッセージ

2025 年 5 月 14 日、SDGs やサステナビリティへの取り組みなどについて、環境 ISO 学生委員長の古賀貫太が、横手幸太郎学長にインタビューを行いました。

Q1. 新ビジョン「YOKOTE VISION」とサステナビリティとの関係と、千葉大学の今後の取り組みについて教えてください。

千葉大学は師範学校や病院から始まり、150 年以上にわたり千葉の地に貢献してきました。今や学部数は 11 となり、多彩なメンバーがそろっています。生命や医療、そして、地球環境や宇宙環境の研究、さらには生活環境や職場環境など広い意味での環境を含め、千葉大学の強みをそのまま社会につなぎ、持続可能な社会の実現に貢献していくために、「YOKOTE VISION」を策定しました（詳細 p.1）。多様な学部やセンターにおける、環境やサステナビリティに関連した研究や、環境 ISO 学生委員会をはじめとする学生活動、あらゆる人が過ごしやすい環境を作るための千葉大学 DEIB (C-DEIB) 推進宣言（詳細 p.6）など、大学がモデルとなって社会に実装していきます。この実現のため、研究・教育・産学連携のさらなる推進を目指し、2025 年 4 月に「株式会社千葉大学コネク」
という子会社をつくりました（詳細 p.7）。大学の経験を社会に還元し、社会のニーズをより鋭敏に捉えて大学に取り入れるという、社会と大学をつなぐ役割を持っています。



千葉大学は文部科学省の令和 5 年度「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」に採択され、10 年後を見据えた様々な取り組みが 2024 年度からスタートしました。例えば、大学と産業界、地域とをつなぐ結節点として、柏の葉キャンパスに「Biohealth open Innovation Hub (BIH)」という新たなオープンイノベーション拠点を 2025 年 5 月に開所しました（詳細 p.5）。新施設では、宇宙環境での植物栽培や、免疫ワクチンと植物研究を融合させ、口から摂取するコメワクチンの研究などユニークな生命・環境科学分野の研究を行っていく予定です。

また、YOKOTE VISION の実現に向けた行動指針の 1 つとして、「より良く生きる」があります。予防医学や社会科学分野には「Well-Being」の研究に取り組む教員もいます。西千葉キャンパスの横の土地を活用して、新しい町と大学をつなぎ、Well-Being を実現できるようなセンターが建てられないかについても青写真を描いています。

Q2. 2025 年の国際情勢の変化を踏まえて、千葉大学はどのように方向性を定めていくべきだとお考えですか。

アメリカは様々な面において、他国に大きな影響力を与える国です。第二次トランプ政権の政策に関連して、ダイバーシティや SDGs においても影響が懸念されていますし、アメリカの大学において科学技術予算が大幅に削減されたことには驚きました。日本はアメリカとの関係が深いこともあり、日本に影響が及んできたときにどうするか、大学を運営する立場としては慎重に判断しなければならないと考えています。現時点では、ダイバーシティや持続可能性という考え方を維持して、今まで取り組んできたことを大きく変えることなく、将来アメリカが再び変わったときに、日本が先に行っているくらいになればと思っています。

Q3. 学生主体の環境マネジメントシステムの取り組みと社会貢献についてどのようにお考えですか。

千葉大学環境 ISO 学生委員会の 20 年以上にわたる取り組みは、大学としても非常に大きな意味を持つと思っています。日本は資源が潤沢にあるわけではなく、その点では決して恵まれた国とはいえません。また、環境問題をはじめ、人口減少が止まらないなど、多くの社会的な問題を抱えています。学生自身が問題を認識し、学び、課題解決のために行動する姿勢、そして、企業や自治体と連携して、活動の成果を社会に還元するという点で、こうした学生主体の取り組みはとても重要で千葉大学の誇りです。YOKOTE VISION の中に「信頼」というキーワードがあるように、社会と大学をつないで未来を拓いていくとともに、学生や教職員が千葉大を誇りに思える環境があり、地域の方々が温かく見守ってほしいと思える大学であり続けたいと思います。

編集担当：古賀貫太（法政経学部 3 年）

大学概要

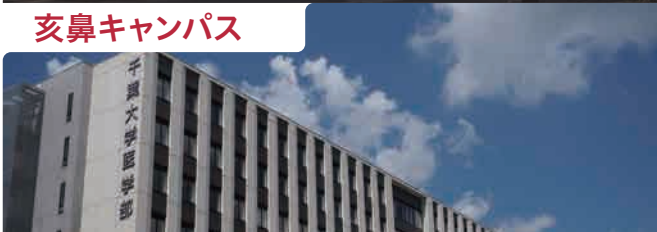
千葉大学は千葉県、東京都内に5つのキャンパスがあり、約 18,000 人の学生・教職員が学び、研究をしています。2024 年度に情報・データサイエンス学部と大学院情報・データサイエンス学府および大学院情報学研究院を新設し、11 学部、19 大学院を有しています。

西千葉キャンパス



〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33
本部、国際教養学部、文学部、法政経学部、教育学部、理学部、工学部、情報・データサイエンス学部、人文公共学府、専門法務研究科（法科大学院）、教育学研究科、融合理工学府、情報・データサイエンス学府、総合国際学位プログラム、国際学術研究院、人文科学研究院、社会科学研究院、理学研究院、工学研究院、情報学研究院、附属図書館、教育学部附属幼稚園・小学校・中学校、各センター等

亥鼻キャンパス



〒260-0856 千葉県千葉市中央区亥鼻 1-8-1
医学部、薬学部、看護学部、医学薬学府、看護学研究科、医学研究院、薬学研究院、看護学研究院、附属図書館（亥鼻分館）、医学部附属病院、各センター等

松戸キャンパス



〒271-8510 千葉県松戸市松戸 648
園芸学部、園芸学研究科、園芸学研究院、園芸学部園芸別科、附属図書館（松戸分館）

柏の葉キャンパス



〒277-0882 千葉県柏市柏の葉 6-2-1
環境健康フィールド科学センター

墨田サテライトキャンパス



〒131-0044 東京都墨田区文花 1-19-1
デザイン・リサーチ・インスティテュート

大学名	国立大学法人千葉大学	学生数	学部学生数	10,450 名
設立年月日	1949 年 5 月 31 日 ※国立大学法人千葉大学は 2004 年 4 月 1 日に発足		大学院学生数	3,472 名
本部所在地	千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33 (西千葉キャンパス)	役員・教職員数	研究生等	476 名
		土地面積	合計	14,398 名
学長	横手幸太郎 (2025 年 4 月 1 日現在)	建物床面積		3,658 名
				1,194,895 m ²
				611,792 m ²

(2025 年 5 月 1 日現在)

TOPICS 環境

全学副専攻プログラム^{※1}・バンチプログラム^{※2}の新設

千葉大学では、文理や専門分野の垣根を越えて多様な分野を学べる履修体系を整え、学際的に現代的課題に取り組む副専攻やバンチプログラムを提供しています。さらに、身につけた知識やスキルを電子的に証明する「オープンバッジ」制度も導入しています。2024年度には新たに以下の2つの履修プログラムがスタートしました。

※1 副専攻プログラム：主専攻とは別に、関心のある他分野の知識を体系的に学べる制度。指定科目を履修し、修了要件単位数を満たすと修了証明書とオープンバッジを取得できる。

※2 バンチプログラム：特定のテーマに沿って複数の授業をまとめて履修できる小規模な履修パッケージ。修了要件単位数を満たすとオープンバッジを取得できる。

詳細はこちら



環境サステナビリティ実践学

「環境サステナビリティ実践学」は、地球規模および地域社会が直面する多様な環境課題を、文理横断的・学際的な視点から捉え、協調・協働しながら主体的・実践的に解決に取り組むことで、持続可能な社会の実現に貢献できる「環境課題解決人材」を育成する、学部生を対象としたプログラムです。普遍教育科目と専門教育科目を横断したカリキュラムを通じて、「課題発見力」「課題解決のための立案力」「解決策を実行するための実践力」の3つの力を体系的に養成します。地球環境や資源、エネルギーなどに関する科学的知見を深めつつ、社会制度や経済的・技術的観点からの分析力を磨き、環境法や環境経済、公共政策なども学びます。さらに、PBL（課題解決型学習）やインターンシップなどの実践活動を通じて、プロジェクトマネジメント力、発信力、リーダーシップなどの実務能力を身につけます。



オープンバッジ

詳細はこちら



ソーシャル・イノベーション・プログラム

「ソーシャル・イノベーション・プログラム」は、経済格差や環境問題などのグローバルな社会課題に対応し、VUCA^{※3}時代において、新たな価値を創造し課題を解決できる次世代型人材の育成を目指す、大学院生を対象としたプログラムです。Society 5.0の実現を背景に、デジタル技術の活用と倫理感を基盤とした実践知の獲得を重視し、専門分野を超えた学びを通じて多角的視野を養います。具体的には、学際的な知識をもとに発信する「学際性」、知識を連携させて課題解決を導く「連携力」、情報技術を活用する「データ力」、学んだ知識を社会に実装する「実装力」、自ら計画を実行する「主体性」などを身につけ、変化の激しい時代において国際的に活躍できるリーダーの素養を育てます。



オープンバッジ

詳細はこちら



※3 VUCAとは、変動性 (Volatility)・不確実性 (Uncertainty)・複雑性 (Complexity)・曖昧性 (Ambiguity)が高く、将来予測が困難な現代社会の状況を表す言葉。

コラム 必修科目「企業における環境サステナビリティ」を約600名が履修

「環境サステナビリティ実践学」では、3つの必修科目を設けています。その一つが、2024年度に新たに開講した「企業における環境サステナビリティ」です。この科目では、企業が取り組む環境保全や社会貢献活動（製品開発、技術革新、教育、CSRなど）をテーマに、環境サステナビリティの社会的意義や経営戦略上の役割について理解を深めます。さらに、持続可能な社会の実現に向けた実務知識の習得とキャリア形成の視点を育むことを目的に、企業などで活躍する社会人による講演やディスカッションを取り入れています。2024年度にはおよそ600名の学生が履修しており、学生の高い関心がかえり人気科目となっています。



教室に入りきれない100名ほどはオンラインで受講

オープンイノベーション拠点 Biohealth open Innovation Hub (BIH)

千葉大学は、文部科学省・日本学術振興会の2023年度「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」に採択され、免疫学・ワクチン学、予防医学などの研究を戦略的に強化し、成果の社会実装と学内展開を進めています。その拠点の一つとして、2025年3月31日、柏の葉キャンパスに「Biohealth open Innovation Hub（BIH）」を新設し、同年5月23日に、開所記念式典と「千葉大学 J-PEAKS シンポジウム」を開催しました。当日は産学官の関係者など175名が来場し、J-PEAKSのビジョンやBIHの可能性を広く発信する場となりました。

BIHは、大学・企業・地域の連携を促進し、新たな出会いや協働からイノベーションを生み出すオープンイノベーション拠点です。学内100%出資の「株式会社千葉大学コネクト」と連携し、J-PEAKSの活動拠点としても機能することで、地域課題の解決や次世代のスタートアップ支援に貢献していきます（詳細 p.7）。オープンスペースには、カフェの併設も予定され、イベントやセミナーを通じて多様な人が集い、学び合う交流の場を提供します。また、空間づくりにもサステナビリティの視点を取り入れ、椅子やテーブルには2019年の房総半島台風で倒木した山武杉を再利用し、自然災害や森林保護、資源循環への意識を高める取り組みとして活用されています。



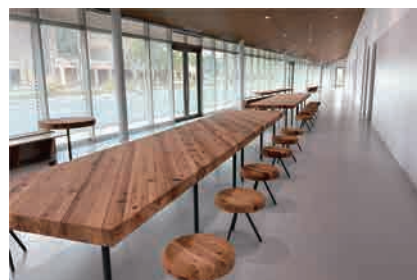
詳細はこちら



BIH 外観



開所記念式典の様子



倒壊した山武杉を再利用した椅子やテーブル

工学部 10 号棟の改修で学びと共創をアップデート

西千葉キャンパスの工学系エリアは、戦後に整備されて以来、各棟を中央の渡り廊下でつなぐ南面平行配置が特徴です。築60年を迎えた校舎の再開発の第一弾として、建築学コースの校舎を改修しました。「キャンパスマスタープラン2022」に基づき、西側を学生活動ゾーン、東側を研究ゾーンとする機能再配置を行い、活動が校舎の外にも表れる設計としました。従来4階にあった製図室を低層階の建築スタジオに集約し、1階にはオープンな活動空間を整備しました。教員と20名もの学生によるワーキンググループが中心となり、校舎を「教材化」し、構造や設備の見える化、サインや二次元コードによる情報発信を行っています。また、南面外壁には緑化や環境部材を設置できる仕組みを備え、学びが循環する環境を創出しています。共創拠点（イノベーション・commons）としての機能を高めるとともに、学び合いを支えるスタジオ空間やフレキシブルな研究室配置を通じて、キャンパスの持続可能性と多様性を体現しています。



千葉県産材である山武杉・房州石を使用したロビー

コラム 台風で倒木した杉を活用した「山武ベンチ・パークレット」の設置

工学部建築学コースでは、2024年度の授業課題として「千葉市中央公園プロムナードのリデザイン」に取り組みました。その成果として、中心市街地のにぎわい創出と環境配慮の両立を目指すウォーカブルなまちづくりの一環として「山武ベンチ・パークレット」を提案し、2025年3月に設置しました。このパークレットでは、2019年の房総半島台風で倒木した山武杉を再利用し、災害廃材に新たな価値を与えています。イベント時に活用されにくかった街路樹周辺の空間を憩いの場として再生し、歩いて楽しいまちの実現と地域資源の循環を両立させる取り組みです。地域の自然と共生し、廃材を資源へと転換するこの実践は、持続可能な都市デザインの新たな一歩となっています。



伐採された山武杉の丸太を活用した山武・ベンチパークレット

「千葉大学 DEIB (C-DEIB) 推進宣言及び基本方針」を制定

千葉大学は、2024 年 9 月 24 日、さらなる多様性 (Diversity)・公正性 (Equity)・包摂性 (Inclusion) を推進し、帰属感 (Belonging) を感じられる大学コミュニティを育てていくことが重要であるとの認識に立ち、ダイバーシティ推進部門ならびに学内関係者とともに、千葉大学 DEIB (C-DEIB) 推進宣言及び基本方針を策定しました。策定過程においては、学内の学生および教職員の皆様から意見を募り、意見が反映されるよう努めました。千葉大学は、本来違いを持つすべての構成員が尊重され、その個性と能力が十分に発揮でき、千葉大学に所属してよかったと思える学修、教育、研究、就業環境の実現に取り組んでまいります。



千葉大学マスコット C-DEIB ver. (2024 年度)

千葉大学 DEIB (C-DEIB) 推進宣言

千葉大学は、「つねに、より高きものをめざして」を理念にかかげ、世界を先導する創造的な教育・研究活動を通しての社会貢献を使命とし、生命のいっそうの輝きをめざす未来志向型大学として、たゆみない挑戦を続けています。

そのためには、千葉大学に関係するすべての人の人権が尊重され、差別されることなく、その個性と能力を十分に発揮し、安心して所属できる大学コミュニティの形成と発展が不可欠です。

千葉大学は、多様性 (Diversity)・公正性 (Equity)・包摂性 (Inclusion)・帰属感 (Belonging) の視点に立った実践をより一層推進していくとともに、この取り組みを社会にも広げるため、ここに千葉大学 DEIB の推進を宣言します。

DEIB(C-DEIB)
基本方針はこちら



「運べる診療室」による災害医療活動訓練を実施

千葉大学災害治療学研究所と館山市は 2024 年 8 月 30 日に締結した防災に係る連携と協力に関する協定に基づき、9 月 28 日に「大規模地震時医療活動訓練 in 館山」を実施しました。本訓練では、首都直下地震を想定し、国内で初めてとなる電力自給型の衛星通信機能付き「運べる診療室」(コンテナ型とトレーラーハウス型)の実証訓練を行いました。

太陽光・風力発電機能を備えた「運べる診療室」は、電力や通信が途絶した状況でも診療活動が可能で、本訓練により 2 タイプ(静止衛星とスターリンク)の衛星回線を通じて EMIS(広域災害救急医療情報システム)にアクセスし、マイナンバーカードを使って傷病者の処方薬を確認するとともに、千葉大病院の専門医が衛星通信の映像で診療・治療指示を行える仕組みの有効性を検証しました。「運べる診療室」は平常時にはオンライン会議が可能なワーケーションオフィスとして活用することもでき、災害時には初動医療体制の拠点として機能することが期待されます。なお、本訓練の実施により、千葉大学災害治療学研究所と館山市ほか 14 団体が「防災 × 減災サステナブル大賞 2025」で特別賞を受賞しました。



診療トレーラーハウスでの診療の様子



運べる診療室
(手前:コンテナ型、奥:トレーラーハウス型)

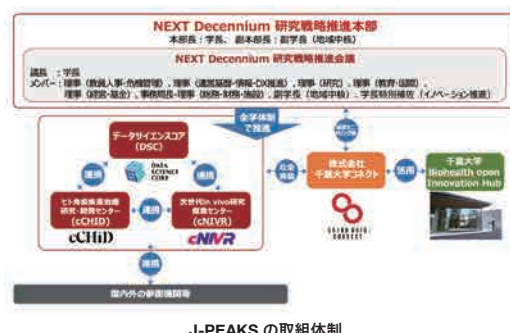
編集担当: 蛭田愛海 (法政経学部 3 年)

TOPICS パートナーシップ

「NEXT Decennium^{※1} 研究戦略推進本部」の設置

千葉大学は、文部科学省・日本学術振興会の「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」において、10年後に国内外の学生や研究者に選ばれる大学を目指す「研究力の向上戦略」と、これを実現するための5年間の「研究力向上計画」を策定し、2023年12月に採択されました。このビジョンの実現に向けて、2024年5月1日、学長のリーダーシップのもとで全学的に推進体制を整えるための司令塔として「NEXT Decennium 研究戦略推進本部」と「NEXT Decennium 研究戦略推進会議」を設置しました。千葉大学は、免疫学・ワクチン学、予防医学、地球観測ビッグデータ、ニュートリノを活用したマルチメッセンジャー天文学など、強みと特色ある研究領域を軸に、学びと研究、イノベーションの好循環を生み出す環境を整え、地域と世界に選ばれる大学を目指して挑戦を続けます。

※1 NEXT Decennium：「次の10年間」という意味。



産学官連携とアントレプレナーシップ教育の新たな拠点を始動

2025年4月1日、千葉大学は、大学の研究成果を社会に届ける新たな連結点として、大学が100%出資する初めての完全子会社「株式会社千葉大学コネクト」を設立しました。さらに同日、課題解決型人材の育成を加速させる「千葉大学アントレプレナーシップセンター」（以下、アントレプレナーシップセンター）も設置しました。

「千葉大学コネクト」は、大学と社会をつなぐことをミッションに、民間等との共同研究の大型化を目指した企画・営業、貸ラボスペースの管理・運営、セミナーやデザインに関するコンサルティングなどの事業を展開します。大学での研究成果は、社会の様々な課題解決に向けた新しい知識や技術を生み出すポテンシャルを秘めています。社会ニーズとこれらの研究成果を社会に実装することで、イノベーションを創造し、地域社会の課題解決を目指します。

一方、「アントレプレナーシップセンター」は、全学横断でアントレプレナーシップ教育を推進する新しい拠点です。医薬理工系にとどまらず、人文社会科学系を含む幅広い分野を対象に、深い教養を土台とした課題設定力と挑戦力を育て、変化の時代に新しい価値を生み出せる自立したグローバル・アントレプレナー人材の養成を目指します。本センターは、起業家を育てる「アントレプレナーシップ教育」に限定せず、これまで実施してきたグローバル人材育成と課題解決型人材育成、ならびにイノベーション創出人材育成の融合を軸として、「社会課題からバックキャストして課題解決を行うアントレプレナー人材の育成」を目指します。

4月24日に開催された記者発表では、横手幸太郎学長をはじめ、株式会社千葉大学コネクトの山本智久代表取締役社長、小澤弘明アントレプレナーシップセンター長らが登壇し、地域と世界に開かれた千葉大学の新たな挑戦と展望を共有しました。

これら二つの拠点を軸に、千葉大学は研究力のさらなる向上と社会実装の加速を推進し、地域に根ざした持続可能なイノベーションエコシステムの構築を目指します。

千葉大学コネクト
についてはこちら



アントレプレナーシップ
センターについてはこちら



記者発表の日に両組織の銘板前にて

千葉大学環境・エネルギー方針

千葉大学では以下の環境・エネルギー方針を定め、環境と持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けた取り組みを進めています。

わたしたち人類は、産業革命以来、大量の資源エネルギーを用いてその活動を発展させてきました。その結果、地球の温暖化、化学物質汚染、生物多様性の減少など、さまざまな環境問題に直面しています。まさに、人間活動からの環境への負荷によって人類の存続の基盤となる環境がおよびやかされています。

また、国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けて、だれひとり取り残さないという考え方のもとで、環境・社会・経済の課題を同時に解決する努力を続ける必要があります。われわれは、こうした世界の現状及び将来に対して、英知を結集させ、教育・研究機関として行動し、社会に貢献していきます。

このため、とくに次の事項を推進していきます。

1. 文系と理系の知恵を集積し、また附属学校と連携し、総合大学としての特長を活かした環境教育と研究の実践を進めます。
2. 省エネルギー・省資源、資源の循環利用、グリーン購入を推進し、構内の緑を保全します。また、化学物質の安全管理を徹底し、汚染を予防します。これらにより環境負荷の少ない緑豊かなキャンパスを実現します。とくに、環境・エネルギーに関連する法規制や千葉大学が同意する環境に関する要求事項を理解し、遵守します。
3. 環境・エネルギーマネジメントシステムの構築と運用は学生の主体的な参加によって実施します。また、学生による自主的な環境活動を推奨し、多様な環境プログラムが実施されるキャンパスを目指します。
4. 環境・エネルギーマネジメントシステムを、地域の意見を反映させながら、地域社会に開かれた形で実施していきます。
5. 国立大学の中で全国トップ水準のエネルギー効率を維持し、継続的に改善していきます。また、エネルギーパフォーマンス改善に繋がる製品やサービスの調達、施設の設計を支援します。

千葉大学では、この環境・エネルギー方針に基づき目標を設定し、その実現に向けて行動するとともに、行動の状況を監査して環境・エネルギーマネジメントシステムを見直します。これにより、継続的にシステムの改善を図ります。

また、この環境・エネルギー方針は文書化し、千葉大学の教職員、学生、常駐する関連業者などの関係者に周知するとともに、文書やウェブサイトを用いて一般の人に公開します。

2004年4月1日制定、2008年4月1日改定、2013年7月24日改定、2019年4月1日改定
千葉大学長 横手幸太郎

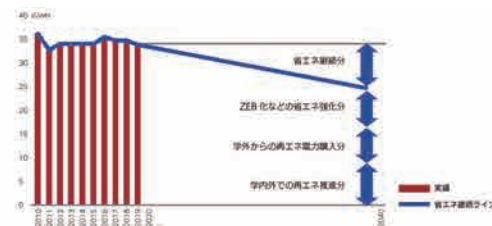
千葉大学の RE100 長期ビジョン

千葉大学は2020年9月、『千葉大学サステナビリティレポート2020』にて、長期ビジョンを宣言しました。

“千葉大学は2040年までに RE100 達成を目指します”

地球温暖化対策の国際的潮流であるパリ協定や日本政府の「2050年カーボンニュートラル宣言」に先駆け、温室効果ガス削減と化石燃料依存の低減を進め、大学の社会的責任を果たします。RE100（Renewable Energy 100%）とは使用電力の100%を再生可能エネルギーで賄うことです。

これまでにISO14001・ISO50001^{※1}を活用した省エネを進め、2004年度比で総エネルギー投入量を9.1%削減（2019年度時点）、さらなる脱炭素化を目指してZEB^{※2}化や再エネ設備の導入を拡充します。不足分は外部調達を含め、学内のすべての電力を再生可能エネルギーで賄います。現在、「RE100企画推進委員会」が具体的なロードマップを検討し、2040年の目標達成に向けて全学で取り組みを加速しています。



千葉大学における電力消費量の推移と見込み

※1 ISO14001：環境マネジメントシステムの国際規格、ISO50001：エネルギーマネジメントシステムの国際規格

※2 ZEB（ゼロ・エネルギー・ビルディング）：快適な室内環境を実現しながら、建物で消費するエネルギーの収支をゼロにすることを旨とした建物のこと

千葉大学の環境マネジメントシステム（EMS）の運用

千葉大学では、2003 年から学生主体による環境マネジメントシステムの実施に取り組んでいます。

国際規格の取得

千葉大学は 2003 年に環境マネジメントシステム（EMS）の構築を始め、2005 年 1 月に国際規格 ISO14001 の認証を取得しました。2013 年には全国の大学で初めてエネルギーマネジメントシステムの国際規格 ISO50001 も取得しました。エネルギーマネジメントが有効に定着したため、2019 年 12 月から ISO50001 のみ自己宣言となりましたが、その後も継続して国際規格に則った環境マネジメントシステム及びエネルギーマネジメントシステム（EMS）を運用しています。

独自の仕組み「千葉大学方式」

千葉大学では当初から「環境 ISO 学生委員会」を組織して大学の EMS 組織内に位置付け、所属する学生が EMS の運用に必要な中核業務を行っています。また、教職員と協力して学内において様々な省エネ・省資源活動、環境意識啓発の取り組みを行っているほか、NPO 法人格を取得して学外での活動も積極的に行っています。さらに、学生委員会の活動に単位と資格を与える制度があります。こうした仕組みを「千葉大学方式」と呼んでいます。

環境・エネルギーマネジメントシステム運用組織

EMS の構成員は、教職員（非常勤講師を除く）、構内事業者、環境 ISO 学生委員会の学生などから成り立っています。また、それ以外の学生・院生や非常勤講師、児童・生徒などは準構成員となっており、大学に属する全ての学生・教職員が EMS に関わっています。

環境 ISO 企画委員会

EMS の運営に関する重要事項や各種企画について、毎月審査・検討を行う伝達と意見交換の場

環境 ISO 実行委員会

各部局に対して、依頼事項・報告事項などを行う意見交換の場

省エネルギー会議

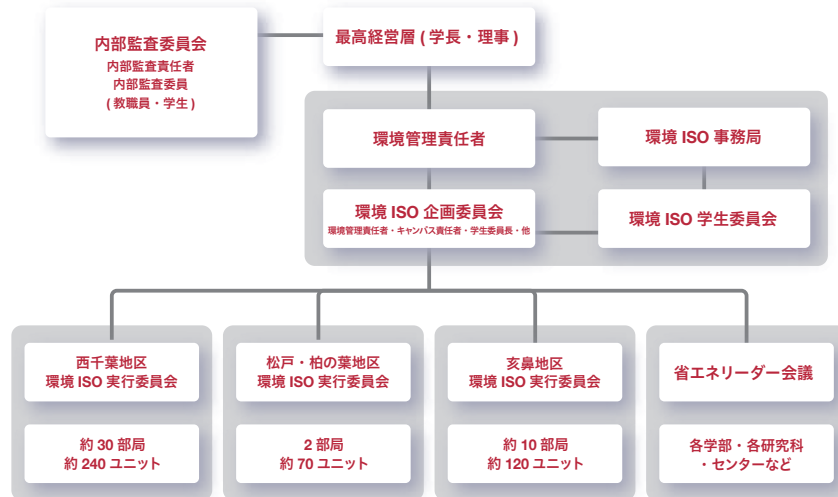
各部局の取り組みや省エネに関する情報交換の場

環境 ISO 事務局

法規制遵守の各種手続きや学内外からの提案・質問の受付、学内各部局との調整、学生委員会のサポートを行う

部局とユニット

部局は事務局、学部、大学院、センター、構内事業者などのこと。大きな部局はさらに研究室（実験系）や学部・学科（非実験系）のユニットに分けられ、大学全体で 40 以上の部局と 400 以上のユニットがある。



環境 ISO 学生委員会による EMS 運用の仕組み

千葉大学は EMS 運用を実務教育の一環と捉え、当初から学生主体での EMS 運用を実践してきました。環境 ISO 学生委員会は 2003 年に大学の一組織として発足し、20 年以上にわたり、大学全体の EMS 構築・運用と地域社会での環境や SDGs に関する活動を行っています。学生委員会は「西千葉・亥鼻地区」、「松戸・柏の葉地区」の 2 地区合わせて約 250 名が在籍しており、様々な活動を展開しています。



環境 ISO 学生委員会の HP はこちら



西千葉・亥鼻地区学生委員会

PDCA サイクルと学生委員会の関わり

千葉大学では学生主体で PDCA サイクル（計画（Plan）・実行（Do）・点検（Check）・見直し（Act））を確実に回し、持続可能なキャンパスづくりを進めています。

Plan

環境目的・環境目標・
実施計画の策定

環境・エネルギー方針に基づき、3年ごとの環境目的と1年ごとの環境目標を設定し、具体的な実施計画を学生委員会が原案作成し、環境 ISO 企画委員会に提出します。

Do

実施計画の実行

4月には全学生・教職員を対象に「環境 ISO 基礎研修」を学生委員会が講師となって実施。年間を通じて省エネ、省資源、分別の推進、緑化美化活動などを行い、学内の環境意識を高めます。



研修の様子

Check

監視測定・評価

年1回の内部監査を学生委員会が主体となって運営し、教職員と共に監査を行います（詳細 p.34）。2024年度は学生94名が参加し、115カ所を監査しました。また、環境目標・実施計画の達成状況を学生委員会が収集するほか、大学が発行する「サステナビリティレポート」の編集を担っています。

Act

見直し・改善

11月には EMS に関する学長による見直しが行われ、次年度の運用に活かします。見直しの結果、EMS マニュアルに修正が必要となった場合は学生委員会が原案を作成します。また、ISO 認証に関する審査が第三者の審査機関によって行われ、学生委員会は審査に必要な書類を収集するとともに、審査に同行して議事録を作成します。

単位化の仕組み「環境マネジメントシステム実習」

学生委員会の活動は、普遍教育科目※「環境マネジメントシステム実習」として単位化されており、座学・実務を通して EMS の専門知識やマネジメントの進め方を身につける場を提供しています。これにより、実務的な能力を持った人材の育成及び学生委員の確保と学生主体の EMS の持続的な運用が可能となっています。

実習Ⅰ

（主に1年生）

ISO や EMS の基礎知識、内部監査や基礎研修等の実務に必要な技能を習得。また、企画立案の仕方やビジネススキルを学ぶほか、実際に上級生と一緒に活動に参加して、EMS の運用に携わります。

実習Ⅱ

（主に2年生）

内部監査員や基礎研修講師、外部審査の議事録作成などの EMS 運用上重要な実務を実習するとともに、企画長やプロジェクト統括などのリーダーを経験し、主体的に活動することで実務経験を積みます。

実習Ⅲ

（主に3年生）

実習Ⅱ終了学生のうちの希望者が、自治体等にインターンして、EMS や環境政策について学び、提言を行ったり、地域創生のワークショップのファシリテーターを経験したりします。2024年度は計14名の学生が参加しました。

実習

プロフェッショナル
（主に3年生）

大学の EMS 運用の根幹業務及び高度なスキルを要する活動を行う学生を対象に、課題解決のための目標設定・年間計画・スケジュール・タスク管理等の流れを1年かけて実践的に学習します。

※普遍教育科目：英語、情報リテラシー、教養展開科目など、国際化・情報化した現代社会において必要な基礎的で共通な技能と知識を習得する科目。

資格認定制度「千葉大学環境エネルギーマネジメント実務士」

千葉大学での実務経験を通して EMS に関する専門的な知識を持った学生であることを外部に対して示す学内資格です。実習Ⅱの受講後も継続して、学生委員会の役職に就いて活動した3年生に対して、学長から与えられます。2024年度は45名を認定し、学生委員会発足以来774名の学生が取得しています。



記念撮影の様子

コラム 千葉大学が国際グリーンガウン賞のファイナリストに選出

千葉大学は、2024年6月、持続可能性に関する優れた取り組みを評価する「International Green Gown Awards（国際グリーンガウン賞）」において、20年以上にわたる学生主体の環境マネジメントシステム活動や企業との連携活動が評価され、Student Engagement（学生の関わり）部門のファイナリストに選出されました。ファイナリストに選ばれた28か国95大学のうち、日本の大学は千葉大学のみでした。

千葉大学は過去に同表彰制度で2回受賞されています。

千葉大学の事例紹介はこちら（英語）



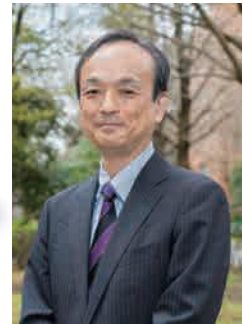
学部長・センター長に聞く！

環境 ISO 学生委員会のメンバーが3名の学部長・センター長に、各部局でサステナビリティや SDGs への取り組みについてインタビューを行いました。

大学院教育学研究科長・教育学部長

藤川大祐 教授

教育学部では未来の教育を担う人材を育てるため、実践的な学びを重視しています。教科知識や指導技術に加えて、物事の本質を深く考え、主体的に行動する力を養うことを目指しています。こうした姿勢は、SDGs の「目標4：質の高い教育をみんなに」にも通じており、誰一人取り残さない社会の実現に貢献します。そのためには学生1人ひとりが創造的に考え、主体的に行動することが欠かせません。教育学部では、「AAR サイクル（Action・Assessment・Revision）」を取り入れ、変化の激しい現代社会の中で素早く行動し、その結果を振り返りながら次の改善に生かすという柔軟な姿勢を身につけることで学生が実際の教育現場に即した力を身につけられるよう支援しています。さらに、株式会社 ZOZO との連携によって、学生が学校の枠を超えた課題に取り組む機会を得ており、社会とつながりながら多角的な視野と課題解決力を伸ばしています。教育学部は、こうした実践的な教育を通じて、持続可能な社会を支える教育者を育てています。



大学院看護学研究科長・看護学部長・看護学研究科長

増島麻里子 教授

現代社会では、医療の進歩や価値観の多様化により、さまざまな健康ニーズが生まれています。看護学部ではこうした変化に対応し、人々の健康と Well-being に貢献できるナース・サイエンティストの育成を進めています。看護師、保健師、助産師のような看護専門職者に加え、「住み慣れた地域でその人らしく暮らす」ことに貢献する看護を科学的に検証し、看護学の発展に寄与する教育研究者としての視点も同時に涵養できることも目指しています。これは、SDGs の「目標3：すべての人に健康と福祉を」にも関連し、生まれてから成長に至る過程、子育てや働き盛りの世代や高齢者、人生の最終段階に至るまで、生老病死のすべてにわたり健やかな生活を支える看護の役割を深く追究します。さらに、災害時支援や新興感染症流行時など社会要請における支援も学びます。看護は身体だけでなく、その人の人生全体を支える点が特徴です。2025年に創立50周年を迎える看護学部は、伝統を大切にしつつ、新たな知識や技術を取り入れ、教育・実践・研究を通じて地域社会への貢献を続けます。



環境リモートセンシング研究センター長

服部克巳 教授

環境リモートセンシング研究センターは、工学部の写真・印刷・画像工学分野を前身に発足し、30周年を迎えました。センターでは「ひまわり」に代表される静止気象衛星や地上観測網のデータを活用し、地球環境課題の解決に取り組んでいます。文部科学省認定の全国唯一のリモートセンシング共同利用・共同拠点として、センシング技術の先端的研究や応用、社会実装等を使命に、国際的な研究を推進しています。現在、先端センシング、環境診断、環境予測、統合解析、社会実装の5つのプログラムを実施し、気候・環境変動、食料問題、災害など SDGs に関わる課題に取り組んでいます。例えば、「ひまわり」データで陸域の植生変動や線状降水帯など極端気象現象を予測し、環境変動への提言や災害軽減に役立てています。地球観測ビッグデータ・AIでの予測技術や気象制御、災害情報のリアルタイム共有で被害を減らし、リモートセンシング技術の社会実装を通じてレジリエント（強靱）な世界の構築を目指しています。



学部・大学院・附属学校での環境教育

千葉大学では環境目的として学内における環境教育・研究を推進させることを掲げています。その中で、環境に関連する科目や書籍を充実させる取り組みを行っています。

学部・大学院における環境関連科目^{※1}の開講

千葉大学では、文系・理系を問わず多様な学部・大学院・センターを有する総合大学の強みを活かし、年間を通じて多様な環境教育を展開しています。2024 年度に開講された環境関連科目は合計 618 科目で、前年度の 638 科目からやや減少しましたが、これは教員の定年退職に伴い一部科目が閉講となったことによるものです。

学部・大学院別の開講科目数は下記の通りです。() は前年度の数。

学部	計 439 (446)	大学院	計 179 (192)
普遍教育 ^{※2}	78 (69)	人文公共学府	10 (13)
国際教養学部	8 (11)	教育学研究科	5 (5)
文学部	10 (14)	融合理工学府	45 (44)
法政経学部	20 (20)	園芸学研究科	105 (116)
教育学部	23 (28)	医学薬学府	12 (12)
理学部	27 (26)	看護学研究科	1 (1)
工学部	56 (61)	専門法務研究科	1 (1)
園芸学部	204 (204)		
医学部	2 (2)		
薬学部	9 (8)		
看護学部	2 (3)		

環境関連科目の一覧はこちら



※1 環境関連科目：「大気・水質・土地・天然資源・植物・動物・人およびそれらの相互関係を含む、組織の活動を取り巻くものであり、組織内の者から地球規模の生態系にまで及ぶ」という定義に関連した科目。

※2 普遍教育：英語・情報リテラシー・教養展開科目など、国際化・情報化した現代社会に必要な基礎的で共通な技能と知識を習得する科目。

コラム 環境関連科目の紹介

「環境教育学概論」(大学院園芸学研究科) 担当教員：三島孔明 准教授

本科目では環境教育の目的や意義、そしてその成り立ちについて学ぶとともに、農業や自然環境に関わる環境教育の実践例を通じて理解を深めます。また、環境コミュニケーションや科学コミュニケーションの実際の取り組みにも触れ、環境教育に関する多様な研究事例についても講義や体験、見学を通して総合的に学習します。

附属図書館の環境関連書籍

千葉大学附属図書館では、環境に関する書籍を充実させることが環境教育・環境研究を促進させるための大切な取り組みの一つと位置づけ、学生の希望も聞きながら環境関連書籍の増加に努めています。2025 年度 4 月時点で、西千葉の本館に 4,535 (前年度 4,548) 冊、松戸分館に 799 (794) 冊、玄鼻分館に 244 (243) 冊が所蔵され、合計 5,578 冊となりました。汚損や重複、内容が古くなった資料を除籍したため、前年度の 5,585 冊より若干減少したものの、環境 ISO 学生委員会の提案で新たに 54 冊入荷し、内容の更新を図ることができました。



本館の書架の様子

教育学部附属学校での環境教育・環境活動

附属幼稚園における取り組み

附属幼稚園では、幼稚園児が毎日過ごして遊ぶ中で、節約やリサイクルに関心を持ち、自分なりに取り組んでいけるような環境を用意しています。まだ使える素材を「もったいない箱」に入れたり、「リサイクルボックス」に分別したりすることが習慣になるように心がけています。



もったいない箱

附属小学校における取り組み

附属小学校の環境 ISO 校内美化委員会には、5年生と6年生の計 18 名が所属しており、校内の環境改善や環境への意識向上に向けた取り組みを行っています。2024 年度は節電・節水企画を実施しました。環境への意識啓発を目的として、委員会に所属している児童が蛇口の見回りをしたり、朝の会に低学年へ呼びかけを行ったりしました。その後、児童の環境意識が広がり、古紙回収の積極的な呼びかけやポスター作成へとつながりました。



古紙回収ボックス

附属中学校における取り組み

附属中学校には整備環境 ISO 委員会があり、各クラスから 5 名が所属し、企画・運営を生徒主体で行っています。2024 年度は、生活環境に関するアンケートの実施、グリーンカーテンや鉢花の育成、資源回収などの活動をしました。また、エアコンや照明などの使用において、省エネに関わる呼びかけも行いました。今後の活動では、古着や古書の回収にも取り組む予定です。委員会の生徒が環境に配慮した工夫や活動をするだけでなく、積極的に情報を発信し、周囲の理解と協力を促すことで、全生徒が環境意識を持てるよう取り組んでいます。

附属特別支援学校における取り組み

附属特別支援学校は、知的発達に障がいのある児童生徒を対象とした学校です。小学部高学年・中学部・高等部では、役員会を中心に 4 つの委員会に分かれて、さまざまな活動を行っています。その中でも環境に関係する活動として、「美化委員会」では、流し台の石けん補充やトイレ等の清掃、グラウンドの落ち葉集めなどを行い、自分たちで校内の環境を整備しています。「リサイクル委員会」では、ペットボトルやアルミ缶の収集、空き缶潰しの活動を行っています。潰した缶は、業者へ売却し、売上金は日本赤十字社に寄付しています。

SDGs と持続可能性について学ぶタイ留学プログラム

普遍教育科目「Global+」と環境 ISO 学生委員会が連携して、2025 年 3 月 16 日から 3 月 30 日までの 2 週間にわたって、SDGs に関する優れた取り組みを行っている海外協定校の 1 つであるタイ・チェンマイ大学にて、海外留学プログラムを実施しました。環境 ISO 学生委員会に所属する学部 1・2 年生の 9 名が渡航し、講義とフィールドワークを通して、チェンマイ大学やタイでの環境に対する取り組みについて学びました。



現地学生との集合写真



参加した千葉大生。蛭田さんは右の象の上の後ろ

参加学生の感想

蛭田愛海さん（法政経学部 3 年）

大気汚染に関する知識を深め、英語でのコミュニケーション力も向上しました。PM2.5 の深刻さや AQI という指標、マスクの効果を学び、現地の対策を知ることができました。また、水素発電地域を訪れ、CO₂ を排出しない発電の仕組みを学び、再生可能エネルギーの可能性を実感することができました。さらに、フィールドトリップでは焼畑で失われた森林をカカオ栽培で再生し、殻を肥料にする循環型農業について学び、SDGs への理解を深めることができました。

国際的なサステナビリティ教育

千葉大学は 51 カ国の大学と 529 件の協定[※]を結んでおり、2023 年度の外国人留学生数は 1,773 人、日本人学生の留学・派遣数は 2,097 人に上ります。このような国際的な連携を活用し、様々なサステナビリティ教育を推進しています。

※大学間協定・部局間協定を含む

タイ・マヒドン大学の短期学生受入プログラムの実施

2024 年 12 月 16 日から 5 日間、タイ・マヒドン大学の学生 7 名を受け入れる短期プログラムを実施しました。本プログラムでは、クッキングクラスや初級日本語、ジャパニーズポップカルチャー、防災準備、日本とタイの国際経済比較など、多様な学びを提供しました。さらに、環境 ISO 学生委員会の学生との協働学習を行い、株式会社 ZOZO やセイコーエプソン株式会社のオフィス訪問、学内の環境活動スポット見学を実施しました。両大学の学生はプレゼンテーションやディスカッションを通じて、それぞれの環境活動や今後の学生主体の取り組みについて意見を交換し、国際的な学び合いと持続可能な社会づくりに向けた交流を深めました。



両大学の環境問題への取り組みについて議論する様子

Japan-ASEAN Online Program toward SDGs 2024 を開催

2025 年 2 月 17 日から 4 日間、千葉大学主催、AUN (ASEAN University Network) 及び国立六大学連携コンソーシアムの共催、岡山大学の協力のもと、オンラインワークショップ「Japan-ASEAN Online Program toward SDGs 2024」を開催しました。本プログラムでは「環境のために学生が起こすことができるアクション」をテーマに、SDGs 目標 7・11・12・13・14・15 に関連する環境課題をめぐって、ASEAN 諸国と日本の合計 9 か国から 57 名が参加し、活発な議論を行いました。学生たちは国や地域の課題や文化的背景を共有し合いながら、具体的なアクションを検討し、最終日には各グループがアクションプランを発表しました。千葉大学の学生 10 名は各グループに加わり、議論や発表を積極的にリードし、参加学生と教員との橋渡し役も担うなど、プログラム全体の運営に大きく貢献しました。



参加者の集合写真

ASEAN 諸国との連携による新たな国際教育プログラム「ESG Sustainable Strategy」

千葉大学は、文部科学省の令和 5 年度「大学の世界展開力強化事業（補正予算事業）～ASEAN 諸国からの留学生受入、定着促進のためのシステム構築等支援～」に採択され、博士前期課程向けの新たな国際教育プログラム「ESG Sustainable Strategy」を開発しました。本科目プログラムは、環境・ビジネス・看護・デザインの 4 分野を横断し、SDGs の 8 つの目標に対応する内容で構成されています。専門分野を問わず大学院生が履修でき、世界が直面する複雑な課題に挑むための知識と実践力を、デザイン・シンキングなど最先端のアプローチを通じて育成します。2024 年度は、千葉大教員約 60 名とタイのキングモクット工科大学トンブリ校 (KMUTT) の協力のもと、4 分野 8 科目 120 コンテンツ（動画 360 本）を制作しました。2025 年 10 月からは、オンライン教育プラットフォーム JV-Campus を通じて提供を開始します。



事業申請時の構想図

※ESG とは：持続可能な成長を目指すうえで重視すべき Environment（環境）、Social（社会）、Governance（ガバナンス）の頭文字

サステナビリティに関する最先端の研究

千葉大学では文系・理系・医薬系を含む総合大学として多様な分野で SDGs や環境に貢献する研究を行っています。その一部について紹介します。

ウェルビーイングな都市環境を目指して

千葉大学予防医学センターの研究チームより

千葉大学予防医学センター 社会予防医学研究部門 中込敦士 准教授

千葉大学予防医学センターは、都市環境が人々のウェルビーイングに与える影響について、精力的に研究を進めています。最近の研究では、柏市柏の葉エリアに住む成人を対象に、スマートフォンアプリを用いて日々の感情や居心地の良い場所、不快な場所などを記録し、分析を行いました。その結果、公園などの公共空間や、飲食店、文化・スポーツ・教育施設といった場所が、人々の瞬間的な心地よさに繋がりがやすいことが明らかになりました。また、人生に対する満足度や幸福感といった長期的なウェルビーイングは、「文化・スポーツ・教育施設」で過ごす時間と関連性が高いことも示唆されています（図1）。

これらの研究成果は、都市計画や政策立案において、人々のウェルビーイングを重視した設計の重要性を示しています。緑豊かな公園を増やしたり、誰もが利用しやすいカフェやレストランを整備したり、地域住民が交流できるオープンスペースを設けるなど、都市環境を整備することで、人々の心身の健康とウェルビーイングを高めることができると考えられます。千葉大学予防医学センターは、今後もウェルビーイングな都市環境の実現に向け、研究を進めていきます。

※本研究は、OPERA 採択事業「ゼロ次予防戦略による Well Active Community (WACo) のデザイン・評価技術の創出と社会実装」および三井不動産株式会社との共同研究の研究費で実施されました。

参照：Yu-Ru Chen et al. (2025): Scientific Reports, Volume 15, article number 4422. DOI : 10.1038/s41598-025-88349-x

プレスリリースはこちら

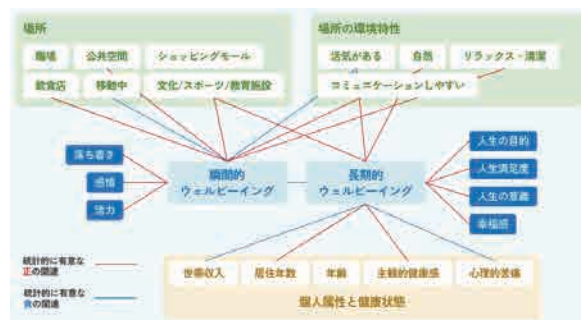


図1 瞬間的・長期的ウェルビーイングと場所や環境特性の関連

用途に応じて目的生成物を自在に選べる光触媒

CO₂ からの持続可能なカーボン・ニュートラルサイクルに向けて

理学研究院 化学研究部門 泉康雄 教授

地球温暖化に強く関与していることが指摘されている CO₂ を、持続可能なエネルギー源である光を用いて燃料や高付加価値物質に変換する研究を行っています。最近では、光触媒や反応設備のコストを生成物の価格が上回ることで、持続可能社会で実現可能なカーボン・ニュートラルサイクルに関する研究を行いました。

そのためには、CO₂ からより高付加価値物質を得る光触媒を調べました。その結果、コバルト (Co)-酸化ジルコニウム (ZrO₂) 光触媒に紫外可視光を照射することで、CO₂ から炭素数が1から3のパラフィン化合物（化学式 C_nH_{2n+2}, n は整数；メタン、エタン、プロパン）を生成できました。また、CO₂ から光触媒により CO を得るのは容易です。そこで、Co-ZrO₂ 光触媒に紫外可視光を照射することで、CO から炭素数が 2,3 のオレフィン化合物（化学式 C_nH_{2n}；エチレン、プロピレン）を選択して生成することができました。右図は光触媒の反応速度、および同じ炭素原子でも質量数が異なる ¹³C を含む ¹³CO₂ を用いたときに生成する生成物（¹³C_nH_{2n+2}, ¹³C_nH_{2n}）をオンラインで追跡できる装置です。持続可能社会での用途に合わせた CO₂ からのさまざまな各生成物（上記炭化水素、その他アルコール、有機酸等）を選択して自在に得る研究を進めています。



オンライン光触媒反応追跡装置

原著論文はこちら（英語）



脱炭素キャンパスを目指す取り組み～カーボンニュートラル～

千葉大学は、「キャンパスマスタープラン 2022」に沿って、省エネ・創エネによるエコキャンパスに取り組んでいます。

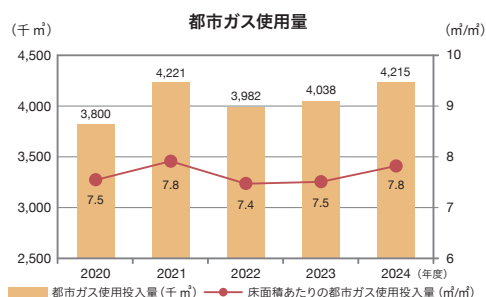
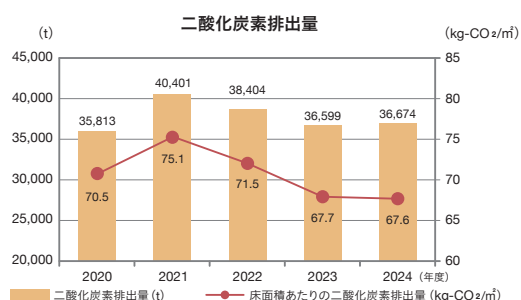
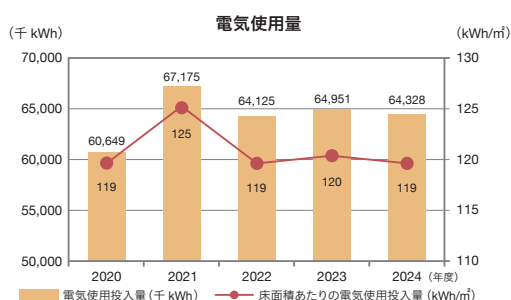
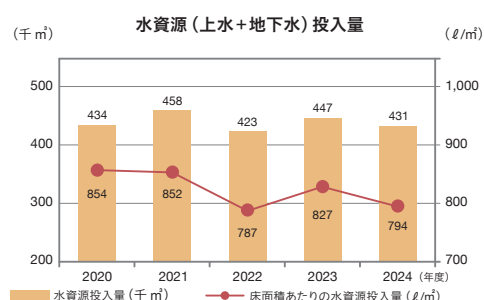
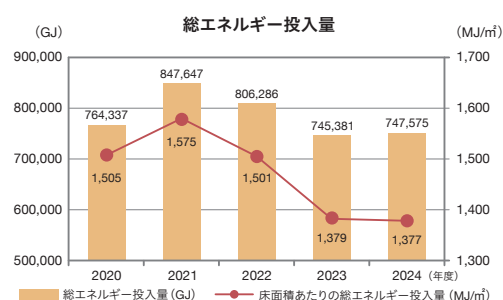
エネルギー消費量の推移

二酸化炭素等の温室効果ガスは電気などの各種エネルギーの利用による排出量がほとんどの割合を占めることから、温室効果ガス削減計画については、エネルギーの省エネ行動計画及び目標に準じることとし、エネルギー使用量の削減を推進することで脱炭素キャンパスを目指しています。

2024年度の千葉大学の総エネルギー投入量は747,575GJで前年度比0.3%増加（電気は64,329千kWhで前年度比1.0%減少、ガスは4,215千m³で前年度比4.4%増加）となりました。エネルギー原単位は1,377MJ/m²となり、前年度比0.1%の減少でした。水資源投入量は前年度比3.6%減少、二酸化炭素排出量は前年度比0.2%増加となりました。

過去5年度のエネルギー原単位(MJ/m²)をみると、2020年度1,507、2021年度1,575、2022年度1,501、2023年度1,511、2024年度1,379(旧計算1,500)とほぼ横ばいで推移しています。省エネ法で求められている「5年間平均原単位を年1%以上低減する」との目標に対しては大学のすべての構成員が達成するための意識を持つことが必要で、今後も更なる省エネへの取り組みを継続していくことが肝要です。

※ 2024年度に、2023年度分に遡って、電気の投入量からエネルギー消費量を算出する係数と、ガスの投入量から二酸化炭素排出量を算出する係数の変更があった。



地域別の総エネルギー投入量 (GJ)

	2019年度	2024年度	占める割合 (2024年度)	コロナ前 (2019年度) との比較
西千葉地区	214,996	185,618	25%	86%
松戸地区	36,135	31,412	4%	87%
柏の葉地区	20,521	16,970	2%	83%
亥鼻地区	153,039	164,008	22%	107%
附属病院	330,196	344,335	46%	104%
墨田地区	-	6,319	1%	-
大学全体	754,887	748,662	100%	99%

※ 環境パフォーマンス詳細データおよび
環境意識アンケートの詳細結果については大学ウェブサイトに掲載



エネルギー管理システム (CEMS) とエコ・サポート制度の運用

千葉大学では「エネルギー管理方針」に基づき、部局ごとに省エネ目標と行動計画を策定し、教職員の省エネ意識向上と具体的な省エネ活動を推進しています。学内では、部局・建物ごとの電気・ガス・上水・井水の使用状況を毎月学内ホームページで公開し、さらに電気使用量をリアルタイムで確認できる「エネルギー管理システム (CEMS)」を運用しています。また、エネルギー効率の低い機器の更新や LED 照明設置などの省エネ対策を支援する「エコ・サポート制度」も継続して実施しています。2024 年度は、照明の LED 化工事 5 件、フリーザーの機器更新 4 件、その他 9 件の取り組みに対して、総額 500 万円弱を補助しました。これにより、年間で約 92,398kWh の電力削減が見込まれています。

太陽光発電システムの導入

千葉大学では、キャンパスの脱炭素化を推進するとともに、災害時にも教育・研究・医療活動を継続できるよう、自然資源を活用した再生可能エネルギーの導入を進めています。1999 年度から太陽光発電パネルの設置を開始し、2024 年度現在では学内 19 箇所に 19 基、合計定格出力 178.6kW の太陽光発電設備を導入しています。月間平均の発電量は約 16,680kWh であり、クリーンエネルギーの創出と温室効果ガス排出削減に貢献しています。



太陽光パネル

学生による省エネ啓発活動

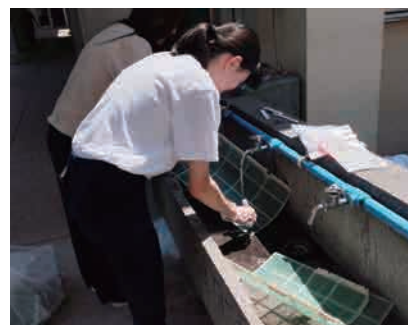
環境 ISO 学生委員会では、学内の省エネ意識向上を目的に、毎年クールビズ・ウォームビズの啓発ポスターを全学生からデザインを公募し、キャンパス内に掲示しています。あわせて、7 月には省エネイベントを開催し、自転車発電でかき氷機を動かす体験コーナーや、省エネ啓発や活動紹介パネルの掲示、クールビズポスターをデザインしたうちわの配布、アンケートに回答すると参加できる抽選会も実施し、学生の省エネ意識の向上に努めました。当日は、千葉大学マスコット「ニシ・イノ・マツ」も登場し、来場者と写真を撮るなどイベントを盛り上げました。今後も学生主体の啓発活動を通じて、楽しく省エネへの理解を深める取り組みを続けていきます。



省エネイベントの様子

エアコンフィルター清掃による省エネ活動

環境 ISO 学生委員会では、学内のエネルギー効率向上を目的に、毎年、研究室でのエアコンフィルターの自主的な清掃を呼びかけています。また、自主的な清掃が難しい研究室に対しては、学生委員会が有料で請け負い、エアコンの効率的な運用を支援しています。2024 年度は亥鼻地区で 57 台、西千葉地区で 29 台、合計 86 台のエアコンフィルターを清掃しました。松戸・柏の葉地区では各研究室に清掃実施記録用紙を配布し、清掃後に回収を行い、清掃を推進しました。



清掃の様子

コラム 学生・教職員の省エネ意識率は 94% !

環境 ISO 学生委員会では、年度初めに毎年学生と教職員を対象に「環境意識アンケート」を行って、大学の web サイトに公開しています。2024 年 4～5 月に行った環境意識アンケート (回答数 2,078 名) によると、「省エネに配慮した生活を意識していますか?」という質問に対して、「いつも意識している」と回答した割合は 52.1%、「たまに意識している」は 42.0% でした。約 94% の人が省エネを意識していることがわかりました。前年度の 91% から微増しました。



環境意識アンケートの結果はこちら

循環型キャンパスを目指す取り組み～サーキュラーエコノミー～

千葉大学は、資源を有効活用し、3R を促進するため、廃棄物、紙、自転車に対して様々な取り組みを行っています。

廃棄物排出量、用紙の購入量の推移

2024 年度の一般廃棄物排出量は前年度比 20.7%の大幅な減少、産業廃棄物排出量は前年度比 1.9%の増加となりました。紙類購入量（A4 換算）は、前年度比 7.1%減少しました。これは引き続きオンライン授業や会議等によるペーパーレス化や各種資料の電子化が進められた結果です。



ごみの分別、資源回収の取り組み

千葉大学では主に可燃ごみ・資源ごみ・不燃ごみ・粗大ごみの4品目の分別を徹底しています。新聞・雑誌・段ボール・紙パックなどの資源古紙を分別回収し、2017 年度から有償売却を実施しています。資源古紙以外の紙袋・紙箱・包装紙などの“汚れがなく束ねられない紙ごみ”は「ミックス古紙」として回収したり、まだ使える“裏紙”を専用ボックスにて回収・再利用したりすることで、可燃ごみの削減に努めています。環境 ISO 学生委員会ではこれらの回収を促進するため、年度初めの基礎研修での広報やポスターを掲示して啓発しているほか、ペットボトルキャップやコンタクトレンズの空ケースの回収・リサイクルの活動も行っています。2024 年度には、西千葉キャンパス内に大規模ごみ集積場が本格稼働し、廃プラスチックや金属くず、電化製品など 22 種類の分別回収に取り組み、リサイクルに努めています。



左からミックス古紙、コンタクトレンズ空ケース、裏紙分別ボックス

生協のレジ袋有料化と「レジぶー基金」の活用

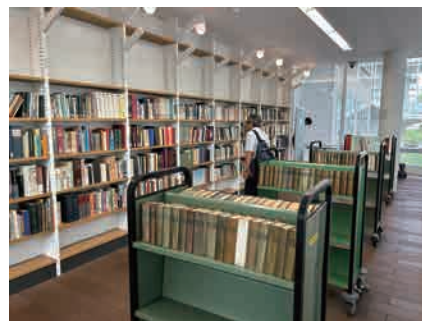
千葉大学生協同組合（生協）におけるレジ袋有料化（1枚5円）は、環境 ISO 学生委員会の提案をもとに、2005 年に実証実験を行い、2006 年度には西千葉キャンパスで、2007 年度には全キャンパスで本格導入しました。レジ袋の利用率は年々減少し、2016 年度以降は 0.5%以下で推移してきましたが、コロナ禍や 2020 年の「容器包装リサイクル法」改定による全国的な有料化の影響で利用率はやや増加し、近年は1%台となっています。2024 年度のレジ袋購入枚数は 6,887 枚（前年度 6,176 枚）、利用率は約 1.2%でした。



また、利用率の低下により節減されたレジ袋購入代金と販売収入を「レジぶー基金」として生協から拠出いただき、学生委員会が環境啓発企画を企画・実施しています。2024 年度はペットボトルキャップ由来のオリジナルボールペンを製作し、基金により半額以下の価格で販売しました（詳細 p.20）。今後もさらなるレジ袋利用削減に向けて、啓発と実践の両面から取り組みを進めていきます。

図書リユースと古本募金の取り組み

附属図書館では、すでに図書館で所蔵している、内容的に古くなっている、などの理由で廃棄する予定の図書を、除籍手続きを経たうえで、廃棄前に再利用する学内の教職員・学生対象の無償譲渡会を開催しています。2024 年度は7月と1月の年2回開催しました。この取り組みは 2006 年から実施しており、平均すると約 3,300 冊の図書が1回の譲渡会の対象になり、そのうち6割程度が引き取られています。残った図書の一部は千葉大学基金（古本募金）に寄附しています。古本募金とは、在学生・卒業生・教職員などから古本・DVD・CD を寄付していただき、その売却利益で千葉大生を支援する取り組みです。



図書リユースの会場

グリーン購入の推進

千葉大学では、グリーン購入法^{*}に基づき「環境物品等の調達の推進を図るための方針」を、毎年度公表しています。オフィス用品やサービス 275 品目を特定調達物品として定め、調達目標を 100%に設定して管理しています。千葉大学創立当初から営業する学内文具店「ショップ大和屋」では、林功店長が「現在取り扱う商品のほとんどがグリーン購入適合製品」と語るように、店頭やカタログに並ぶ商品は環境配慮型が標準となっています。店内ではグリーン購入適合製品の利用促進を掲示で周知し、大学全体で環境配慮型調達を推進しています。

※グリーン購入法：国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律



ショップ大和屋の商品棚

学内シェアサイクル COGOO の活用

西千葉キャンパスでは、放置自転車や駐輪による緊急車両や歩行者の通行妨害を防ぐため、構内移動専用の自転車の持ち込みを禁止しています。その代替手段として、2013 年から構内限定のシェアサイクル「COGOO（コグー）」を導入しました。現在は株式会社エントリーが運営し、スマホアプリを通じて 60 分無料で利用できる仕組みを提供しています。キャンパス内に 10 か所の駐輪ポートを設置し、60 台運用しています。学生・教職員約 2,500 名が登録し、毎月 5,000 回以上利用されています。2022 年からは中古自転車を再利用して活用しています。



駐輪ポートの様子

古本市と古着市の同時開催でリユース促進と支援活動を両立

環境 ISO 学生委員会では、廃棄物削減とリユース意識の向上を目的に、学生や教職員から不要になった本を回収し、販売する古本市を毎年開催しています。2024 年度は6月に本の回収イベントを行い、研究室からの提供分も含めて 573 冊を集めました。10月1日から3日間にわたり古本市を開催し、66冊を販売、売上 23,600 円は全額、日本赤十字社の「令和6年能登半島地震災害義援金」に寄付しました。

さらに今回は「千葉大学 × 京葉銀行 eco プロジェクト」（詳細 p.29）の一環として、古着市も同時開催。約 200 着を 100 円均一で販売し、79 着が売れました。売上金は国際 NGO プラン・インターナショナルに寄付し、途上国の子どもに支援に役立てられました。

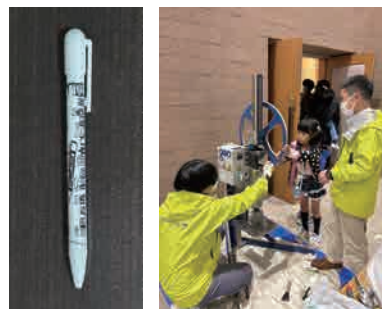


古本市の様子

ペットボトルキャップの回収促進とアップサイクル製品の販売

環境 ISO 学生委員会では、株式会社アサヒユウアスと協働し、ペットボトルキャップの回収促進やリサイクル製品化を進める「みんなでキャップアップサイクル企画」を行っています。一般的にペットボトル本体に比べてキャップの回収率は低く、その改善に向けて学内にキャップ回収 BOX を設置し、POP による啓発を行いました。また、2024 年度は回収したキャップの一部を再資源化したマテリアルを用いて、オリジナルデザインのボールペンを製作・販売しました。デザインは学生コンペで募集し、学内に広くリサイクル意識の浸透を図りました。さらに、2025 年 2 月に行われた「Chiba Winter Fes」(詳細 p.31) にて、粉碎したキャップを素材にカラビナを成型する、体験型のワークショップを行いました。

詳細はこちら



ボールペンと成型機

新入生への環境配慮グッズ配布による啓発活動

環境 ISO 学生委員会では、新入生への入学祝いと環境意識向上を目的に、2018 年度から毎年入学式で環境にやさしい素材を用いたオリジナルグッズを配布しています。これまでに、間伐材を活用したしおりや紙製クリアファイルなどを配布してきました。2024 年度は再生不織布で作られたエコバッグを作成し、2025 年度の入学式で学部新入生 2500 名にプレゼントしました。エコバッグのデザインは千葉大生から公募し、環境や自然を連想させるような図柄を採用しています。

詳細はこちら



配布したエコバッグ

中古自転車の回収・譲渡によるリユース促進

環境 ISO 学生委員会では、構内の放置自転車問題の解消と資源の有効活用を目的に、自転車回収譲渡イベントを実施しています。毎年 2～3 月に卒業する学生などから不要となった自転車を無料で回収し、専門業者による点検・修理を経て、4 月に新入生や留学生などに修理費程度の価格で提供しています。2024 年度は西千葉キャンパスで 14 台を回収し、1 台あたり 5,500 円で譲渡しました。申込者は 277 名に上り、ニーズの高さが確認できました。



イベントの様子

落ち葉や生ごみを活用した地域循環型堆肥の作製と販売

環境 ISO 学生委員会では、資源の有効活用及び環境負荷削減のため、キャンパス内の落ち葉や生協食堂からの生ゴミを乾燥させたものを利用して、「けやきの子」と名付けた堆肥を作製しています。堆肥化にあたっては、地元の NPO 法人環境ネットの協力を得て、勉強会や検討会議を通じて知識と技術の習得を進め、竹ピットの更新も共同で行いました。完成した「けやきの子」は地域住民向けに毎年販売しており、2024 年度は 2025 年 2 月に 10kg 入り 31 袋、3kg 入り 25 袋、合計 385kg を提供しました。資源の循環と地域との連携を推進する取り組みとして、今後も発展を目指します。



堆肥の切り返し作業の様子

「みんなでキャップアップサイクル企画」リーダーのコメント

深田尚杜さん（法政経学部 3 年）

2024 年度は「アップサイクルの見える化」を目標に掲げ、学内の学生や教職員に還元できる内容として、ボールペンを製作しました。現在の取り組みは学内やイベントでの啓発にとどまっていますが、将来的には自治体や近隣住民を含むステークホルダーとの連携を進め、回収ネットワークの拡大を通じて社会に貢献できるプロジェクトへ成長させていきたいと考えております。

自然共生キャンパスを目指す取り組み～ネイチャーポジティブ～

千葉大学は豊かな緑を活かして、環境や自然と共生する持続可能なキャンパスを目指しています。

環境と共生する講義棟の新築 — キャンパスコモン 新しい形

2024 年度に新設した工学・情報学系講義棟は、西千葉キャンパス工学系エリア再開発の第一弾として整備された新築校舎です。平行配置の既存の建物群を活かしつつ、弥生通りに沿った学生活動ゾーンに建物を配置しています。立体的な動線や屋外階段を設けることで、学生が自然とつながる居場所を随所に生み出すとともに、環境的にも将来的なグリーンインフラに寄与する「キャンパスコモン」（みんなの共有スペース）を形成しています。テラスやバルコニーなどの半屋外空間を外装に取り込み、雨どいルーバーや深いひさしで西日を遮るなど、自然光や雨水を活かしながら ZEB Ready^{※1} 相当の省エネ性能を確保しています。エキシビションギャラリーやイノベーションシアターなどの開かれた学びの場が、学内外の交流を促し、活動がキャンパス全体に広がります。この講義棟は、自然と共生しながら環境負荷を抑え、新たな発見や協働を誘発する、持続可能なキャンパス空間のモデルを目指しています。



南西外観：厚みのある外皮による居場所と環境の形成

※1 ZEB Ready とは、建物のエネルギー消費量を 50%以上削減できる高い省エネ性能を備え、将来的にエネルギー収支ゼロを目指す状態のこと

「育てて緑化フラワープランター」で学内の景観向上に貢献

環境 ISO 学生委員会では、学内の景観美化と緑化を目的に「育てて緑化フラワープランター」企画を毎年実施しています。希望する部局に対して、プランターや苗、鉢、底石、土、栽培マニュアルを一式貸し出し、教職員が建物入口など人目につきやすい場所で花を育てます。2024 年度は学内の 12 部局にパンジー 302 株を配布し、秋から春にかけて長い期間花を咲かせ、学内の景観向上に貢献しました。



色とりどりの花が景観を彩る

健康と園芸のつながりを学ぶ「看芸ガーデン」

亥鼻キャンパスの看護学部中庭に設置されている「看芸ガーデン」は、看護学部と園芸学部が協力して運営しています。看護学生が園芸作業を体験し植物の療法的効果を実感することを目的とした学びと癒しの場です。2024 年度後半は「パステルカラーの季節に向けて」をテーマに、冬枯れの景色に暖かさを添え、学生や教職員に癒しを届けるとともに、春には新入生を明るく迎え入れる花壇をデザインしました。このガーデンは、現在では亥鼻キャンパスの人気フォトスポットにもなっています。



やわらかい色合いの花々

緑のカーテン設置で省エネと景観美化を推進

環境 ISO 学生委員会では、夏季の空調使用抑制とキャンパスの緑化を目的に、学際研究棟の壁面に「緑のカーテン」を設置しています。2024 年度は4月から 11 月にかけてゴーヤを植え、学生が水やりや肥料まき、雑草除去、摘芯・誘引などの手入れを行いました。夏場の猛暑の影響で一部成長に差が出たものの、青々とした緑のカーテンが日陰をつくり、涼しげな景観を生み出しました。



編集担当：花岡希義（法政経学部3年）、蛭田愛海（法政経学部3年）

松戸キャンパスの景観向上に向けたプランター管理の取り組み

環境 ISO 学生委員会では、松戸キャンパスの景観美化と老朽化したベンチの使用抑制を目的に、緑風会館前のプランターの管理を継続しています。2020 年度には地元の園芸店の協力で「花の育て方講座」を実施し、以降年2回の植え替えを行っています。2024 年度は、涼しさを演出する色合いの花苗を選定し、イベリスとラミュームを植栽しました。キャンパスの緑化を通じて持続可能な空間づくりに貢献しています。



プランターの様子

コミュニティガーデン「ちーあいふれあいの庭」の運営

環境 ISO 学生委員会は、敬愛大学のボランティアサークルちばくりん敬愛支部と共同でコミュニティガーデン「ちーあいふれあいの庭」を運営しています。毎年春と秋の2回、千葉市の「花いっぱい市民活動」の花苗給付の助成を受けて、地域の方々と一緒に花植えイベントを実施しています。毎年多くの方に参加していただき、学生と地域の方々の交流の場にもなっています。



ちーあいふれあいの庭

地域の街路樹のアガパンサス整備に協力

環境 ISO 学生委員会は、NPO 法人 Drops 主催の花壇整備活動に参加し、西千葉キャンパスの正門前の学園通りにある花壇の整備活動を、毎月第3土曜日に行っています。花壇には、夏に美しい紫色の花を咲かせる南アフリカ原産のユリ科植物「アガパンサス」が植えられており、地域の景観美化に貢献しています。活動当日は、学園通り付近にある「みどりまちくらしの案内所」を拠点に、地域住民と一緒に雑草取りや落ち葉・ゴミ拾い、苗の植え替えや肥料の追加などを行い、作業を通じて地域との交流を深めています。



整備活動の様子

コラム 「農」を媒介としたコミュニティ拠点づくり

公有地と私有地を跨ぐ歩道沿いに設置された西千葉アーバンファーマーミングを事例として 工学研究院 松浦健治郎 准教授

西千葉キャンパス正門前の学園通りでは、地域住民が街路樹帯のアガパンサスを手入れし、まちの景観向上に取り組んでいます。ベンチや「まちいす」を設置して歩行者の快適性を高める社会実験「みんなのみちばたプロジェクト」の一環として、2023 年度には住民主体で野菜を育てる「西千葉アーバンファーマーミング」が始まりました。野菜づくりの楽しさを都市部で味わえるだけでなく、地産地消の推進、フードロス削減、CO₂削減、環境保全、地域コミュニティの活性化、都市と農村の交流促進など、多面的な効果が期待されています。十数名の参加者が交代で日常管理を行い、2 か月に1 回程度、収穫や土の入れ替え、苗・種植え、収穫物を使った料理会などのイベントを開催しています。子ども連れから高齢者まで幅広い世代が集い、交流の場となっている点も大きな特徴です。2024 年 11 月に実施した地域住民アンケートでは、歩道の両側で野菜を育てる活動について「良いと思う」「とても良いと思う」と回答した割合が 82%に達しました。これらの結果は、都市の歩道空間を活用したアーバンファーマーミングが、コミュニティ形成とまちの魅力向上に寄与していることを示しています。



11 月に開かれた収穫祭の様子

詳細はこちら



安心安全キャンパスを目指す取り組み

人体や環境に悪影響を及ぼす化学物質や下水排水、受動喫煙対策に関して取り組んでいます。

千葉大学化学物質管理システム「ククリス」の運用

千葉大学では、各研究室において化学物質を適正に管理・使用し、環境への影響を最小限に抑えるために「ククリス（CUCRIS：Chiba University Chemical Registration Information System）」を活用しています。2007 年度に導入され、化学物質の購入時の登録からリスクアセスメント、重量管理、廃棄までを一元管理するシステムで、現在では約 95%という高い稼働率を維持しています。また、年 2 回「化学物質の管理状況点検」を行い、試薬・薬品などの管理状況を確認しているほか、大学の環境マネジメントシステムの中でも、研修での周知・チェックシートによる自己点検、環境 ISO 内部監査での現場確認など、化学物質の管理徹底の確認を行っています。



内部監査の様子

PRTR 法^{※3}対象化学物質の管理と集計

千葉大学では、環境に影響を及ぼす可能性のある PRTR 法対象物質（515 物質）の使用量を集計しています。大半の試薬や薬品をククリスに登録することで、効率的なデータ管理を実現しています。2024 年度の PRTR 法の対象物質のうち、使用（排出・移動）量が 100 kg 以上のものは表の通りです。PRTR データは全国で集計され、化学物質のリスク（エコチル調査^{※4}など環境リスク評価）に関する疫学調査などにも活用されています。

※3 PRTR 法：特定化学物質の環境への排出量の把握および管理の改善の促進に関する法律の通称。

※4 エコチル調査：環境省が 2010 年から実施している大規模な疫学調査「子どもの健康と環境に関する全国調査」

PRTR 法対象物質使用（排出・移動）量				単位：kg
管理番号	対象物質名	入量	残量	使用量
80	キシレン ^{※2}	5497	1061	4437
127	クロロホルム ^{※1 ※2}	5533	2477	3056
186	ジクロロメタン ^{※2}	2814	934	1880
392	ヘキサン ^{※1 ※2}	8182	1963	6219
411	ホルムアルデヒド	1772	1488	285
674	テトラヒドロフラン	677	478	198

※1 西千葉地区における届出対象物質

※2 亥鼻地区における届出対象物質

受動喫煙防止と禁煙支援の取り組み

千葉大学では、望まない受動喫煙を防ぐため、原則として敷地内を全面禁煙としています。健康増進法改正に伴い「特定屋外喫煙場所」を設置していますが、松戸地区と柏の葉地区に各 1 か所設けているのみで、西千葉・墨田・亥鼻・附属病院地区は完全禁煙です。12 月には環境 ISO 学生委員会が、路上喫煙や隠れ喫煙がないかどうかの巡回を行いました。また、総合安全衛生管理機構では、健康診断時に喫煙者へ啓発パンフレットを配布し、「禁煙支援外来」を通じて禁煙をサポートするなど、喫煙率低下に向けた支援を続けています。

下水排水の自主検査の実施

千葉大学では定期的に下水排水の自主検査を行っています。2024 年度は亥鼻地区で、医学部系統で水素イオン濃度（pH）が、看護学部系統で BOD（生物化学的酸素要求量）、SS（浮遊物質）、ノルマルヘキサン（動植物油類）、水銀、フェノール、亜鉛などが基準値を超過しましたが、総合安全衛生管理機構からは正勧告後に改善を確認済みです。松戸地区では 2023 年度末に松戸市の立ち入り検査で全りん・全窒素の基準値超過の指摘を受けており、市へ改善計画を提出するとともに対策を実施し、現在は基準値内です。柏の葉地区ではノルマルヘキサン（動植物油類）の超過がありましたが改善済みです。西千葉地区と亥鼻地区の病院系統では年間通じて基準超過はありませんでした。

安全確保のため学生が環境点検実施

環境 ISO 学生委員会では、西千葉キャンパス・松戸キャンパスを巡回し、ゴミ拾いを行うとともに、放置自転車や危険物など環境を損なう要因がないかを点検する活動を年に 1 回実施しています。

大学による社会的な取り組み

千葉大学ではダイバーシティ推進やサステナビリティに関する社会的な側面の推進に向けた活動をしています。

ダイバーシティ等の推進の取り組み

千葉大学ダイバーシティ推進部門では、教職員・学生の仕事や研究と家庭生活の両立を支援するため、看護学教員による不妊治療・妊娠・育児などに関する総合相談、女性専用休憩室の設置、関連図書の貸出、病児ケア勉強会の開催、ベビーシッター利用補助、研究支援要員の配置など、様々な取り組みを行っています。また、理工農学系分野での女性教員採用の促進により、2007年度に16%だった女性教員比率は2025年には24.6%にまで向上し、事務職員の女性比率も27%から52.7%に増加しました。なお、全労働者に占める女性の割合は57.2%、管理職に占める割合は21.4%です。

2024年度には、千葉大学 DEIB[※](C-DEIB) 推進宣言及び基本方針を制定し(詳細 p.6)、千葉大学マスコットの C-DEIB バージョンを活用した啓発活動を、創立75周年記念式典などで展開しました。さらに、性の多様性への理解促進を目的とした C-DEIB 映画上映会を開催するなど、多様性と包摂性のある学内環境づくりを進めています。

※ DEIB…Diversity, Equity, Inclusion and Belonging
(多様性、公正性、包摂性、帰属感)

詳細はこちら



映画上映会ポスター

障がい者雇用の取り組み

千葉大学では、障がい者の方々にキャンパスの清掃業務を担っていただく教育環境整備グループを設置し、学内の主要道路の落ち葉やごみの清掃などを行っています。スタッフは様々な障がいを抱えていますが、キャンパスの清掃業務にやりがいを感じており、障がいによる差異はあっても、清掃業者に依頼した場合と同じ水準の結果を残すことを就業ポリシーとして掲げています。また、障がいのある方が同じキャンパスで当たり前働いていることは、学生や教職員の意識改革にもつながり、共に働く社会づくりの一助になると考えています。



清掃業務の様子

多文化共生と国際理解教育の推進

近年のグローバル化の進展に伴い、学校や地域社会における多文化共生が当たり前となる中、千葉県内では日本語指導が必要な外国人児童生徒が2,000人を超えられています。千葉大学インターカルチュラル・スタディセンターでは、千葉県域の公立学校教員や外国人児童生徒指導協力員を対象に、異文化理解や多様性への対応、子どもの思考と言語習得などをテーマとした研修を実施し、地域の教育現場を支援しています。また、多様な言語や文化的背景を持つ人々が共に学ぶ千葉大学では、地域社会と連携した国際理解教育にも力を入れています。2024年度は、延べ45名の留学生を県内の中学校や高校へ派遣し、1,613名の生徒と交流を行いました。地域の生徒たちが多文化に触れ、異文化適応力を育む機会を提供することで、持続可能な多文化共生社会の実現を目指しています。

詳細はこちら



教員研修の様子

地域防災力強化に向けた「千葉市消防団 CUMST※」発足

千葉大学は、千葉市との包括連携協定に基づき、2025 年 1 月 1 日に千葉大学医学部機能別団員チーム「千葉市消防団 CUMST」を発足しました。医学部救急サークル C-TAT の学生 10 名と災害治療学研究所の教員 1 名で構成されるこのチームは、大地震などの大規模災害発生時に、医療分野での専門的な知識と技術を活かして応急救護活動や避難所等における健康管理を行うことを任務としています。医学部生が主体となる大規模災害団員チームは国内でも先駆的な取り組みであり、地域防災力のさらなる向上が期待されます。

※ CUMST（カムスト）：Chiba University Medical Support Team



千葉市役所で行われた発足式・入団式の様子

社会人向け講座「すみだ・千葉大学 dri※デザインスクール」を開講

千葉大学は、墨田区との共同事業の一環として、2024 年 8 月から 2025 年 1 月にかけて社会人向け講座「すみだ・千葉大学 dri デザインスクール」を開講しました。この講座は、墨田区に在住又は在勤の社会人を対象としており、全 12 回の講義・実習により、地域の課題や資源の発見を通じてデザインの方法論を修得し、その知識をもとにした様々な場での地域貢献活動等の実施や参加と、それによる地域活性化を目指しています。千葉大学のデザイン領域の複数の専任教員からデザインの素養を涵養するための講義を行い、小グループで区内の「課題発見」や「資源発見」を通して、「課題解決」や「資源活用」などの提案を行いました。

※ dri：デザイン・リサーチ・インスティテュート



初回講義参加者による集合写真

健康について楽しく学べる！「健康応援イベント」を開催

総合安全衛生管理機構では、若い世代に対して健康教育・健康相談等を行うことで健康づくりを応援することを目的に、千葉市稲毛区保健福祉センター健康課・食育推進員、千葉大学生協同組合と協同で、2024 年 12 月 6 日に学生向けの「健康応援イベント」を開催しました。当日は約 200 名の学生が参加し、肺年齢測定や血管機能検査、塩分クイズ・朝ごはんチェック、おすすめレシピの配布、握力測定チャレンジ、抽選会コーナーといった参加型の企画を通して、楽しみながら健康を学ぶことができました。



健康応援イベントの様子

コラム 医学部生が全国医学生 BLS 選手権大会で総合準優勝

2024 年 9 月 22 日に開催された「第 10 回全国医学生 BLS 選手権大会」にて、千葉大学医学部救急サークル「C-TAT」が総合部門で準優勝を果たしました。この大会は日本救急医学会学生・研修医部会が主催する、心肺蘇生法（CPR）を含む一次救命処置（BLS）の技術と知識を競う大会で、今回は全国から過去最多となる 47 大学、237 名の学生が参加しました。手技の習得および現場における実践的なコミュニケーション能力を養う貴重な機会となりました。



出場した学生たちと指導教員

学生活動を通じた社会的な取り組み

千葉大学ではさまざまな学生団体やサークルが、SDGs 達成に貢献する社会的な取り組みを推進しています。

障がいのある方との交流を通じた学びと地域連携

千葉大学公認サークル「障害者問題研究会おにっこ」は、障がいのある人の余暇活動の充実を目的に活動しています。四街道市にある「手をつなぐ親の会」と連携して、工作やレクリエーションのほか、学生が付き添ってのお出かけなども実施しています。保護者や介護者とは異なる立場で学生が関わることで、交流先の方々にとって新たなコミュニティが生まれ、貴重な体験の機会となっています。また、学生自身にとっても直接の触れ合いを通じて多くの学びや気づきを得る貴重な機会となっています。



レクリエーションの様子

手話通訳で障がいのある学生をサポート

手話サークル「ウルトラマンの会」では、手話で日常会話ができるよう単語などを中心に勉強しています。また、地域の聴覚障がい者の方などから手話を学んでいます。毎年、入学式や卒業式などの式典では壇上で通訳を行っています。大学祭では手話コーラスに取り組み、手話に対する理解を深めることを目指して活動しています。



手話通訳を行った学生達

フェアトレード※ 推進への取り組み

環境 ISO 学生委員会では、千葉市職員やフェアトレード事業者の方々と協力し、地域の皆さんにフェアトレードへの理解を深めていただく活動を進めています。2024 年度は千葉市内で開催される関連イベント7つに出展し、フェアトレードの麻ひもを使ったミサンガ作りなどのワークショップも行い、子どもたちも楽しみながら学べる機会となりました。また、学内関係者にもフェアトレードを身近に感じてもらうため、千葉大学生協の協力を得て、期間限定でフェアトレード商品の販売を実施しました。

※ フェアトレード：発展途上国の生産者と先進国の消費者が対等な立場で貿易を行うこと。生産者の生活向上を目指す。

千葉市の
フェアトレード商品は
いかがですか？

販売期間 1月20日(水)～31日(金)
販売場所 ライフセンター



千葉市が目指す「ちばトレード」
ローカル フェアトレード 地域経済 国際貢献
インターナショナル フェアトレード フェアトレード
フェアトレード フェアトレード フェアトレード

期間限定販売ポスター



詳細はこちら

本学留学生が「チーバくんグローバルパートナーズ」に任命

外国人の視点を活かし、暮らしやすい千葉県づくりを推進する「チーバくんグローバルパートナーズ」に、人文公共学府博士後期課程のフィトリア・ノリザさんが、2023 年度から3年連続で任命されました。学校や病院、役所などの手続きで困っている外国人の方々の通訳や、インドネシア人コミュニティの相談窓口を作るなどの支援を行いました。



任命状を手にするフィトリアさん

学生支援とボランティア活動団体「ふれあいの環」

ふれあいの環は活動趣旨の違う6つの団体で構成され、学生による学生支援活動（ピアサポート）やボランティア活動を行っています。

詳細はこちら



ノートテイク会（聴覚障がい者支援）

授業に同席し、講義や周りの音を文字にする情報保障によって、聴覚障がいを持つ学生を支援しています。練習会や入学式・卒業式などでの字幕通訳も行っています。



卒業式の舞台袖

チャレンジドサポートみのり（身体障がい者支援）

身体に障がいを持つ学生の学生生活の支援のため、車椅子使用者の移動や授業参加の支援・学生生活の相談・健常者の障がいの理解促進活動・学内バリアフリーマップの作成などを行っています。

C-vol（ボランティア支援）

学生のボランティア活動を支援するための情報発信・ボランティア活動への参加をしています。2024年度は、防災イベントやビーチクリーン、マラソン大会、東日本大震災復興支援イベントなどに参加したほか、「ちばシティサバイバルキャンプ」を開催しました。



防災イベントの様子

CISG（留学生支援）

留学生と日本人学生との交流会、入寮サポート、母国の文化を紹介する「Universal Festival」、大学祭での留学生屋台の運営支援、季節行事や映画鑑賞会などを企画・実施しています。



12月に開催したユニフェス

career port（キャリア支援）

千葉大生全員に自己のキャリアを考え、社会で役立つスキルを身につける機会を提供するために、午前中から活動的に過ごす朝活イベント「朝チバ」、正しく努力する習慣と思考を身につける「学チカ会」などを行っています。

GCAP（学生コミュニティ支援）

高校までと違う環境に不安を感じている学生のために、4月に「新入生サポート会」を行うなど、学部・学年を超えたつながりの場を作り、交流することのできる環境を提供しています。

防災イベント「ちばシティサバイバルキャンプ（CCSC）」を開催

ちばシティサバイバルキャンプ（CCSC）は、地域の子どもたちが災害時の正しい知識や役に立つ技能を楽しく学び、防災に対してより関心を持つことを目的に、2015年度から開催されています。2024年度は10月に千葉市、NPO法人千葉県キャンプ協会、本学ボランティア団体C-volの共催で、約50名の子どもたちが防災ゲームやロープワーク、防災クラフトを体験しました。



参加した子どもたち

「第6回いなげボッチャカップ」に千葉大生がスタッフ・選手として参加

2025年2月16日、稲毛区主催の「第6回いなげボッチャカップ」が開催され、本学ボランティア団体C-volに所属する学生と普遍教育科目「ソーシャルラーニング」の受講学生が、スタッフ・選手として参加しました。コート設営や審判といった大会運営を通して、パラスポーツに対する興味と関心を深めることにつながりました。また、ボッチャが障がいの有無や若者男女問わず楽しめるスポーツであることを再認識する機会となりました。



大会の様子

CCSC リーダー・いなげボッチャカップ参加

菊地 美如さん（教育学部3年）

CCSCでは、子どもたちが楽しんで防災を学べるようプログラムを工夫しました。ロープワークや防災クラフトでの笑顔や歓声がとても嬉しかったです。千葉市と共催したことで、避難所の段ボールベッドや簡易トイレなどを体験できたのも良い機会でした。ボッチャ大会では競技の経験がなくても、同好会の皆さんの丁寧な説明のおかげで安心して運営に関わることができました。また、大会を通して地域の方と交流でき、誰もが簡単にプレイできるボッチャは人と人をつなぐ素晴らしい競技であると実感しました。

大学を支える事業者の取り組み

千葉大学では構内に事業所を持つ事業者と一緒に環境に取り組んでいます。また、業務を委託する関連事業者にも契約の際に環境配慮を要請しています。一部の事業者に環境 ISO 学生委員会がインタビューしました。

構内事業者 千葉大学生協 柴崎智彦 専務理事

ライフセンターでは、グリーン購入法に準じた製品のほか、家具端材や海洋プラスチックごみを再利用したエコな文房具を取り扱っています。また、環境 ISO 学生委員会と連携して、精米時に砕けた米を活用した完全植物由来の「米ストロー」を1本5円で販売し、環境への意識向上を図っています。さらに、レジ袋の利用を減らす「レジぶー基金」によって集められた資金は、学生委員会が行う環境啓発活動に充てられています（詳細 p.18）。2025 年からは、学生の食生活を支えるための「ミールプラン（年間定期食券）」を導入しました。欠食防止だけでなく、食数の見通しが立つことで食品ロス削減にもつながり、持続可能な社会を目指す取り組みの一環となっています。



ミールプランのパンフレット

構内事業者 アエレカフェ

アエレカフェでは、環境保全の観点から、テイクアウト容器に燃やせるバイオプラスチックを採用し、店内での節電にも取り組んでいます。さらに、「千産千消（千葉でつくられたものを千葉で消費する）」の考え方のもと、千葉大学で生産した食材や、地域農家から仕入れた卵やお米を使用しています。店内に緑を多く取り入れるなど、設立当初からできることを積み重ね、地域に根ざした店舗運営を行ってきました。地域の方も利用できるというのも一つのコンセプトではありますが、現在、地域住民の利用は一部にとどまっています。今後は学外での出店などを通じて、地域とのつながりをより一層深めていく予定です。



店内の様子

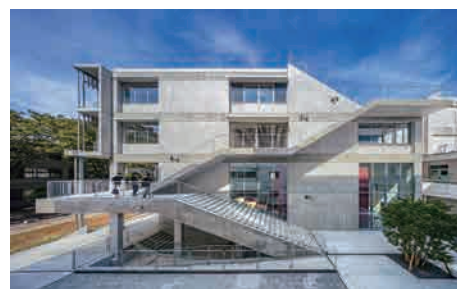
関連事業者 株式会社イズミ・コンストラクション 武田恵 執行役員 管理部長

千葉大学とのかかわり

当社は大学や防衛省、特許庁などの公共工事を中核とする総合建設業です。2013 年に千葉大学亥鼻地区の総合研究棟の改修工事を皮切りに、西千葉地区の附属図書館の増築、緑のテラスなどに続き、近年は工学・情報学系講義棟の新築、工学部 10 号棟の改修などを担当しました（詳細 p.5、p.21）。

SDGsへの取り組み

「できることを当たり前に取り組む姿勢」を大切にしており、若手社員の育成や資格取得支援、OJT（職場内で実務を通じて行われる教育訓練）など通じた技術者教育は、SDGs 目標 4「質の高い教育をみんなに」にもつながっています。また、ISO14001 に基づく環境マネジメントシステムを運用し、CO₂排出抑制のための業務効率化による仮設照明や空調の使用時間の削減、ペーパーレス化、廃材の分別や再利用可能な資材の適切な管理にも積極的に取り組んでいます。協力会社とも連携し、環境配慮の意識を現場全体で共有することを大切に、現場ごとに環境目標を設定し、達成状況を定期的に確認しています。今後も、施工現場からできるサステナビリティの実践を一步ずつ継続し、建設業として社会的責任を果たしていきます。



建築施工を担当した工学・情報学系講義棟

企業や団体とのパートナーシップによる取り組み

大学や学生が、さまざまな企業や団体とパートナーシップを組んで、サステナビリティへの取り組みを行っています。

学生の発想で SDGs 企画を実施「千葉大学 × 京葉銀行 eco プロジェクト」

環境 ISO 学生委員会は、地域への環境負荷削減と環境や SDGs の意識向上に貢献するという目的のもと、2017 年度に株式会社京葉銀行と協同プロジェクトを立ち上げました。2024 年度は約 60 名のプロジェクトメンバーがさまざまな企画を立案し、7 企画に取り組みました。その一部を紹介します。



詳細はこちら

Let's Study SDGs

子どもたちの SDGs に関する知識と行動への意識向上を目的に、千葉市・船橋市の 15 か所のアフタースクール等を訪問し、約 300 名の児童にレクチャーと工作ワークショップを実施しました。資源を有効活用する体験として、古着を使ったバッグやペットボトルキャップを使ったマグネット作成を行いました。



レクチャーの様子

こどもエコまつり

子どもたちにゲームや工作を通じて環境について考える機会を提供する体験イベントで、2024 年度は「こどもの国キッズダム」や「そごう千葉店」などとも連携し、3 回実施し、親子連れなど合計で約 1,300 名が参加しました。



イベントチラシ

古着市

京葉銀行の行員や学生・教職員から集めた古着を、地域住民に 0 円～100 円で販売し、収益を SDGs に取り組む団体に寄付する企画です。2024 年度は 5 回開催し、700 人以上が来場、336 着をリユースすることができました。



公民館で開催した様子

ダイバーシティ企画

京葉銀行の行員や学生・教職員に、ダイバーシティに関する研修を行う企画です。2024 年度は発達障がいへの理解を深めることを目的に、学内向けと行員向けの研修を合わせて 4 回行いました。



学内向け講習会

まちのほんだな企画

本の物々交換によるリユースと間接的な人の交流促進を目的に、京葉銀行千葉みなと本部内に「まちのほんだな」を期間限定で設置しました。



本棚の様子

金融教育と交流会

学生と行員の交流と、学生の金融教育を目的に交流会を実施しました。金融講座「投資と SDGs 視点の起業を考えよう」では、基本的な投資の考え方を学ぶだけでなく、サステナビリティの視点を取り入れたビジネスモデルの構築や、環境・地域社会に貢献する企業の在り方を考える機会となりました。

イオンモール株式会社と「地域の健康を支える場づくり 共同研究部門」を設置

千葉大学は、2024 年 10 月 1 日、イオンモール株式会社とともに、持続可能な地域づくりに向けて、「地域の健康を支える場づくり 共同研究部門」を設置しました。本研究部門では、地域住民の健康と健康行動に寄与する商業施設や場の特徴を明らかにし、その特徴を踏まえた取り組みの実施と評価を行います。共同研究を通して、健康なまちづくりや公衆衛生に関する学術的な知見を商業施設の事業に活かすことで、全ての世代の方々が自然に健康になれる環境づくりを目指します。また、本研究で得られた成果を地域・産業界へつなげ、企業等の研究・開発パートナーとして、我が国の持続可能な社会づくりに貢献します。



詳細はこちら

編集担当：古賀貴太（法政経学部3年）

「2024 年度千葉大学スタートアップ支援事業 Demo Day supported by ちばぎん」を開催

千葉大学 IMO スタートアップ・ラボは、2025 年 2 月 28 日、研究者や学生の起業家精神醸成、研究成果・技術シーズの事業化による千葉大学発スタートアップの創出促進を目的に、千葉銀行の支援を受けて「千葉大学スタートアップ支援事業 Demo Day supported by ちばぎん」を開催しました。当日は、2024 年度に実施した 2 つのスタートアップ創出支援プログラム「学生スタートアップ支援事業」と「千葉大学 GAP ファンドプログラム なのはなコンペ 2024」の採択者が各々の成果を発表しました。



参加者の集合写真

「ファッションとサステナビリティ」をテーマに ZOZO との協同プロジェクト

環境 ISO 学生委員会は、2022 年度より株式会社 ZOZO と、「ファッションとサステナビリティ」をテーマに協同プロジェクトを実施しています。2024 年度は約 20 名の学生が 4 グループに分かれ、それぞれのテーマで企画した成果を、「Chiba Winter Fes 2025」（詳細 p.31）で披露しました。



詳細はこちら

環境

海洋ごみ問題に着目してビーチクリーン活動に取り組み、その経験をもとに紙芝居とワークショップを作成し、Chiba Winter Fes で 160 人の子どもたち楽しんでもらいました。



紙芝居上演

人権

ファッションにおける人権問題について学びを深めた上で、企業 3 社に実際の取り組みについて取材し、結果をまとめたパネルを展示しました。



パネル展示

ダイバーシティ

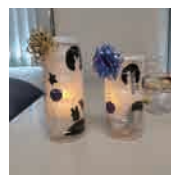
障がい者を理由にファッションを楽しめない人がいる現状や、インクルーシブウェア※の認知度を高めることを目的に、教育学部附属特別支援学校の教員の方に取材し、その内容を発信しました。



ウェア実物も展示

地域

廃棄物の再利用方法を地域の方に知っていただくことを目的に、「おうちで使えるおしゃれグッズづくりワークショップ」を行い、ペットボトルと LED ライトを用いたランタン工作や的あてゲームを実施しました。



ランタン

※インクルーシブウェア：障がいの有無や体型の違い、性別などに関係なく、誰もが便利に使える「インクルーシブデザイン」の考え方を取り入れた服

企業の社会課題への取り組みを学生が取材

環境 ISO 学生委員会では、株式会社ブレンセンターと連携し、環境・社会課題の解決に取り組む企業や人を紹介する Web メディア「Perspectives」の記事制作に協力しています。学生がインタビューに同席し、質問や編集後記の執筆を行うことで、企業活動や社会課題に対する理解を深めます。2024 年度は 2 件の取材に 3 名の学生が参加し、多様な産業や企業の取り組みを直接学ぶ機会となりました。今後も、学生がビジネスパーソンとの対話を通じて視野を広げ、将来のキャリア形成や社会課題解決への関心を高める取り組みとして継続していきます。



詳細はこちら



初回の記事

千葉市と連携して環境啓発動画を制作・公開

環境 ISO 学生委員会は、千葉市地球温暖化対策地域協議会の次世代分科会の一員として、地球温暖化問題に対しての効果的なアクションを検討・実施しています。2024 年度は、小中学生向けの環境啓発教材として 2023 年度に制作した環境啓発動画「黒湖たからが行く！温暖化対策最前線」のショートバージョンを作成し、千葉市地球温暖化対策地域協議会事務局の YouTube チャンネルに公開しました。



詳細はこちら



© ナレッジキャピタル

編集担当：川上竣太郎（法政経学部 3 年）

地域とつながる環境啓発イベント「Chiba Winter Fes 2025」開催

環境 ISO 学生委員会は、環境・SDGs への関心を地域に広げることが目的に、2017 年度から「Chiba Winter Fes」を主催しています。2025 年 2 月 16 日に開催し、株式会社オオクシをはじめ多くの企業の協賛・協力のもと、過去最多の約 2,200 名が来場しました。大ホールではエコマジックショーや学生サークルによるパフォーマンスを行い、学生企画の子ども向けワークショップブースのほか、企業ブースではヘアアレンジ教室や電動モビリティの試乗会、給電車両の実演、モノレールの運転シミュレーター体験、リサイクル素材を使った小物づくり、さらには大学周辺の飲食店やキッチンカーの出店、フリーマーケットの開催など、子どもから大人まで楽しみながら学べるプログラムを展開しました。子どもたちからも「環境に関する体験などもできて学びが深まった」という声が多数聞かれました。



参加者の集合写真



詳細はこちら

イベントリーダーの声

横谷和希さん・蛭田愛海さん（法政経学部 3 年）、前橋美佑さん（国際教養学部 3 年）

半年前から準備を進め、多くの地域の方や企業の方々のご協力をいただき、過去最多の来場者数を記録し、感無量でした。環境や SDGs について楽しく学んでいたことをとても嬉しく思います。



SDGs や社会課題について語りあう「未来を語ろう！夏の学生会議」開催

環境 ISO 学生委員会は、環境・SDGs・社会課題等について学生が一緒に学び・交流し・考えることで、自分たちの未来について考え・行動する契機になることを目的に、「未来を語ろう！夏の学生会議～ポスト SDGs 時代を考える～」を、8 月 28 日に開催しました。地域の高校生 11 人を含む 46 人が参加し、基調講演や分科会を行い、ポスト SDGs を見据えて解決したい社会問題について活発に意見を交換しました。



ポスター

地域イベントを通じた環境啓発活動

環境 ISO 学生委員会は、国内最大級の環境イベント「エコプロ 2024」や、千葉県最大の環境活動見本市「エコメッセ 2024 in ちば」をはじめ、「大学のあるまちの夏まつり」、「第 27 回ふなばし環境フェア」、「第 31 回稲毛区民まつり」、「2024 年度防火・防災フェスティバル」（千葉県主催）、「松戸まつりイン 2024」、「第 51 回松戸市子ども祭り」など、地域住民向けのさまざまなイベントに参加しました。会場では、パネル展示による学生委員会の活動紹介や、子ども向けのワークショップを通じて、地域の方々に楽しみながら環境意識を高めてもらう機会を提供しています。



松戸まつり

国内外での発信・交流によるネットワークの拡大

環境 ISO 学生委員会は、学生主体の EMS や SDGs の取り組みを国内外へ発信し、持続可能な社会の実現に貢献しています。2024 年度は、6 月 3 日に中国・同済大学で開催された「ASCN (Asian Sustainable Campus Network)」年次大会で 2 名の学生が活動を発表したほか、7 月 6 日に公立鳥取環境大学で開かれた「第 18 回環境マネジメント全国学生大会」へ 3 名が参加し、11 月 15 日には京都大学で行われた「サステナブルキャンパス推進協議会」年次大会で 2 名が分科会発表を行いました。また、地域に向けても、広報紙「いそちゃんだより」を発行し、自治会の回覧板を通じて学生活動や身近なエコ活動を紹介するなど、地域とのつながりを深めています。



プレゼンする学生の様子

編集担当：蛭田愛海（法政経学部 3 年）、横谷和希（法政経学部 3 年）

NPO 法人としての取り組み

環境 ISO 学生委員会は、学内の EMS 運用で培った知識や経験を地域に還元するため、2009 年に NPO 法人格を取得しました。大学組織としての位置づけとは別に NPO 法人としても、地域と連携した活動を積極的に行っています。NPO の理事長も役員もすべて学生によって構成されているのが特徴です。NPO 法人として 4 つの事業を行っています。

エコ教室事業

小学校・学童クラブへの出張授業やショッピングモール等のイベントで子どもを対象に SDGs をテーマとしたワークショップを開催しています。2024 年度は JR 千葉駅 × ペリエ千葉「ちばえきつながるプロジェクト」が主催する、「きっぷの芯で学ぶ！夏休みサステナブルワークショップ」に参画し、きっぷの芯のアップサイクル体験やごみ分別を学べるゲームなどを実施しました。

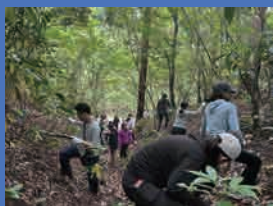


出張授業の様子

植樹里山保全事業

高尾 100 年の森プロジェクト

公益財団法人環境生活文化機構が主催し、佐川急便株式会社が共催するプロジェクトに 2016 年度から参加しています。月 1 回、里山の整備・保全活動のお手伝いをしながら、森に生息する動植物の観察も行っています。



活動の様子

“K” LINE の森・海岸清掃活動

川崎汽船株式会社と里山協定を結び、2012 年から“K” LINE の森を整備してきました。多くの人に里山や海岸の環境の重要性について知ってもらえるような機会を作ることを目標に、2024 年度は幕張の海岸清掃活動と群馬県の森林の植樹活動を行いました。



活動の様子

環境活動推進事業

千葉大学の環境マネジメントシステム (EMS) を運用してきた経験や知識を活かし、他大学や企業の環境報告書に掲載される第三者意見の執筆を行っています。2024 年度は国立大学法人秋田大学と株式会社 TOA シブルの環境報告書の第三者意見を執筆したほか、量子科学技術研究開発機構 (QST) の環境報告書の意見交換会に参加し、SDGs の講習会の講師を担当しました。

コンサルティング事業

企業に対し、環境省の策定した EMS のガイドライン「エコアクション 21」の認証取得のためのコンサルティングを行っています。2024 年度は 2 社に対して、必要資料の作成アドバイスや会社訪問、オンラインによるコンサルティングを行いました。

コラム 卒業生からのメッセージ

2018 年法政経学部卒業 江戸川区役所区民課勤務

築尾優実さん

大学時代は環境 ISO 学生委員会で副委員長を務め、エネルギー班や堆肥化班、NPO のエコ教室の活動に取り組みました。中学生向けの教材づくりでは、分かりやすい資料を作ろうと穴埋め式にしたり、名称を親しみやすく変える提案もしました。2 年生のときは班長として行政の方と多く関わり、「地元での市役所で働きたい」という思いが一層強まりました。現在は区役所で戸籍関係の窓口業務を担当しています。学生時代に学んだメールのやり取りや打ち合わせ、イベント準備で培った対応力は、今の仕事にも活かしています。特に「どうすれば相手に伝わるか、興味を持ってもらえるか」を意識するようになりました。公務員の仕事は成果が数字で見えにくい分、「区民のために働く」という思いが支えです。感謝の言葉をもらえる瞬間には大きなやりがいを感じます。人前で話すのが苦手だった私も、仲間と活動する中で自然と対人スキルが磨かれました。大学時代に得たコミュニケーション力やリーダーシップは、今も大きな財産です。どの部署でも必要なのは協調性と、周りのやる気を引き出す力。これからもその思いを大切に、地域のために働きたいです。



法規制等の遵守状況・物質収支

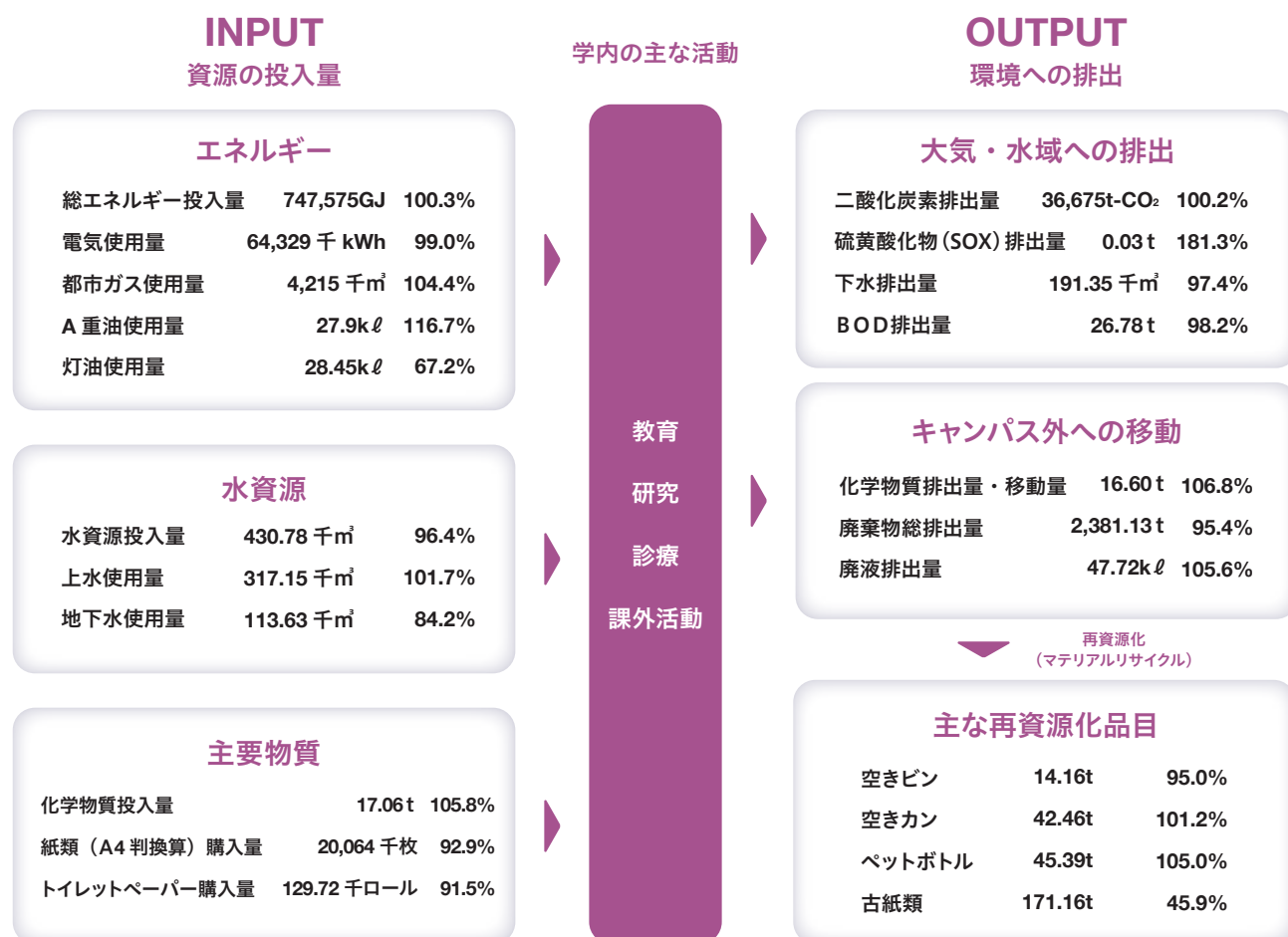
千葉大学では環境に関連する法令・条例などの規制遵守により環境負荷の低減と汚染の未然防止に努めています。

環境関連法規制の遵守について

千葉大学は、環境関連法規制を遵守するために、法定有資格者について毎年特定するとともに、研究室等では「環境影響調査」「環境規制遵守評価チェックシート」を用いて、法規制の該当状況・履行状況について自己点検し、その点検状況を環境ISO内部監査（詳細 p.34）で確認します。年度初めには各ユニットで専門研修・緊急事態対応研修を行い、構成員に化学物質、実験機器、実験動物等の取り扱いや緊急時の対応方法を周知しています。環境に関する訴訟・違反はありませんでした。下水排水の自主検査については定期的に実施しています（詳細 p.23）。

物質収支（マテリアルバランス）

大学の教育・研究活動等から生じる環境負荷は以下の通りです（％は前年度比）。千葉大学では、これらの環境負荷の適正管理に努め、環境負荷低減に積極的に取り組んでいます。



集計範囲：国立大学法人千葉大学（西千葉、亥鼻、松戸、柏の葉、墨田）、対象期間：2024 年度（2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日）

通勤・通学に伴う排出量（スコープ3）について

学生・教職員・入構する業者の通学・通勤に伴う温室効果ガスの排出量を試算しました。入構許可証を発行した車の総年間走行距離を、通勤手当の常勤・非常勤比率、通勤手当の距離区分などをもとに試算したところ、7,771,741 kmでした。自動車乗用車の二酸化炭素排出係数 133g-CO₂/km・人を適用すると、通学・通勤・業者用自動車からの二酸化炭素排出量は 1,034t/年と推計できます。この数値は、千葉大学から排出される CO₂ 量 36,674t/年 (2024) の 2.8%となります。なお、この概算は、入構許可台数と通勤手当をもとに行っており、実際の稼働状況を正確に捉えたものではありません。

環境 ISO 内部監査の実施と結果

千葉大学では毎年9月下旬に教職員と学生がチームを組んで、全キャンパスの内部監査を実施します。

学生と教職員がチームを組んで監査を実施

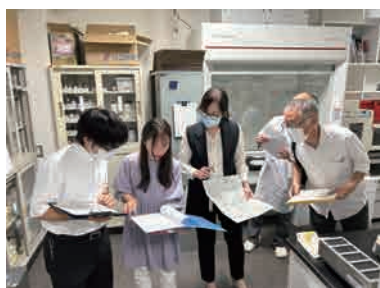
千葉大学では、「千葉大学環境・エネルギーマネジメントマニュアル」に基づき、環境目的・目標・実施計画の進捗や環境関連法規制の順守状況を確認する内部監査を毎年実施しています。2024年度は、9月25日から3日間、監査員研修を修了した教職員74名と環境ISO学生委員会94名の計168名が監査員として参加し、教職員と学生の混成チームにより全キャンパス115ユニット（研究室等）を対象に内部監査を実施しました。監査結果、発見された課題を重要度に応じて「重大な要改善点」「軽微な要改善点」「観察事項」として指摘し、是正を促しています。

学生主体の内部監査運営

環境ISO学生委員会では、学生が監査員として現場に参加するだけでなく、「内部監査統括」を担当する3年生が中心となり、準備段階から積極的に監査運営に関わっています。監査計画書やチェックシートの作成、監査対象ユニットの選定、指摘事項のとりまとめ、報告書原案の作成に加え、当日の監査に参加する約100名の学生のシフト調整まで、幅広い業務を担っています。学生が主体となって監査を運営することで、実践的なマネジメント能力を養うとともに、組織全体の持続可能な改善を支えています。



口頭ヒアリングの様子



実験室で記録を確認する様子



毒劇物の残量を測定し管理簿と照合する様子

内部監査の結果

地区名	監査ユニット数	良好ユニットの割合	1 監査ユニットあたりの指摘割合		
			重要な要改善点	軽微な要改善点	観察事項
西千葉・墨田	62 (64)	61 (67) %	39 (42) %	55 (33) %	55 (31) %
松戸・柏の葉	14 (15)	71 (67) %	7 (20) %	21 (33) %	64 (73) %
亥鼻	39 (45)	59 (67) %	62 (24) %	67 (29) %	62 (44) %
合計	115 (124)	62 (67) %	43 (33) %	55 (31) %	58 (41) %

※() は前年度の結果 ※良好ユニット：重大または軽微な要改善点の指摘がなかったユニット

1. 重大な要改善点について、指摘件数は計49件(41件)で前年度比増加、指摘率は43%(33%)で増加

今年度は、重大な要改善点の件数、1 監査ユニット当たりの指摘率がともに増加しました。大学院医学研究院・医学部において23件（8件）、110%（29%）と増加したことが影響しています。一方、昨年度指摘率が115%だった大学院理学研究科・理学部は73%と減少しました。指摘件数は毒劇物の管理とフロン使用機器の点検において悪化し、これらで全体の7割を占めます。

2. 監査結果が良好なユニットの比率は62%で、前年度比5pt減少

良好ユニットの比率は62%（67%）で、5pt 減少しました。地区ごとでは、前年度比西千葉地区が6pt 減少で61%、松戸・柏の葉地区が4pt 増加で71%、亥鼻地区が8pt 減少で59%でした。その中でも大学院薬学研究院・薬学部は39pt 増加し89%でした。

内部監査結果を踏まえた改善意見

1. 内部監査の指摘事項にもとづく運用の改善が確実に図られるように、所見書に対して被監査ユニットが確実に改善計画・報告を提出する必要があります。
2. 重大な要改善点の指摘率が大幅に増加した部局大学院医学研究院・医学部、および、指摘率が50%を超えている部局は改善を図る必要があります。
3. 「毒劇物の管理」に関する重大な要改善点が全体の42%（37%）を占め、昨年に引き続き多くなっています。特に、保管庫の転倒防止措置と管理簿に関する指摘が多いです。引き続き、管理の徹底を図る必要があります。
4. 「フロン使用機器の認識・点検」に関する重大な要改善点は14件で、前年度の9件から増加しました。特にフロン使用機器を認識していないという指摘が13件（8件）で増加しました。フロン使用機器に関する周知の徹底が必要です。
5. 「高圧ガス容器」に関する重大な要改善点は1件（2件）で改善しています。減少傾向にあるため、継続が求められます。
6. 「不要薬品」に関する軽微な要改善点が7件あり、再発する（処理できずに同じ指摘を受ける）傾向があります。なお、今年の監査対象となった化学物質を保有している77ユニットのうち、14ユニット（18%）が「不要薬品」を保有しており、そのうち8ユニット（57%）が「処理の見通しが立っていない」状況です。全学として対処を検討する必要があります。
7. 「環境規制順守評価チェックシート」や「エネルギー効率改善チェックシート」、「環境目的・目標・実施計画」に関する重大な要改善点の指摘件数が7件（2件）で増加しました。研修の未実施も3件（1件）で増加しました。環境マネジメントシステムの運用に関わる部分の徹底が求められます。
8. 内部監査で見いだされた良好事例については、サステナビリティレポートに掲載するなどの水平展開を行っています。環境ISO事務局および環境ISO学生委員会において、この点をさらに推進させていくことを期待します。

内部監査結果における良好事例

内部監査では指摘をするだけでなく、各ユニットが独自に進めている効果的な取り組みについては「良い点」として積極的に記録し、他のユニットへの横展開を図っています。2024年度は105件の「良い点」がありました。

毒劇物の管理	・毒劇物を管理する棚の外側に、棚の中にある薬品の一覧があり、一目でわかるようになっている。 ・毒劇物が保管されている棚の段ごとに色分けされており、管理簿もその色分けが使われている。
高圧ガス管理	・ガス漏れ対策として、水素ボンベに水素濃度計が設置されている。
フロン関連	・フロンの点検記録用紙に、次回の点検の日付が書かれた紙を貼付している。
研修、 緊急時対応	・救急車を呼ぶ際の手順シートを作成後、全員に共有しいつでも見られるようになっている。 ・半年に一回のガイダンスで環境ISOについて説明を行い、資料をクラウドに保存することで誰でもいつでも確認できるようにしている。 ・緊急事態研修の資料の中に、AEDの設置場所が表示されている。
省エネ対策	・省エネルギー大会で得られた情報を、教職員がよく出入りする部屋に貼付して周知している。 ・電源やドアなど至る所に省エネ啓発の掲示がされており、意識の向上に役立っている。
その他	・環境目的・目標・実施計画の要点をまとめて掲示してある。 ・オートクレーブ等の機器ごとに、機器側面にマニュアルを掲示している。

統括学生の声 栗屋日菜（理学部4年）、清水陽斗・田中政光・中上春花・矢尾采音（法政経学部4年）

2年生の時は当日の内部監査に参加するだけでしたが、3年生では統括担当として半年以上かけて準備を進めました。はじめは分からないことばかりで不安もありましたが、統括・統括補助の5人で役割を分担し、委員会全体を動かしながら進めることができました。多くの関係者と連携しながら取り組んだ経験は、自分にとって大きな学びとなりました。

環境目的・目標と達成度評価一覧

千葉大学環境・エネルギー方針に基づいて、環境目的・環境目標・実施計画を設定しています。毎年、環境ISO 学生委員会が取り組み実績を収集して評価の原案を作成しています

○：目標達成した項目 △：目標を概ね達成しているが更なる努力が必要な項目 ×：目標達成できなかった項目

注）千葉大学の「環境目的・環境目標・実施計画」は環境マネジメントシステム（EMS）の運用上で策定しています。EMS 適用範囲は、主要4キャンパス（西千葉・亥鼻・松戸・柏の葉）と墨田サテライトキャンパスですが、医学部附属病院は対象外です。したがって、本達成度評価についても附属病院は含まれません。

2024 年度の
環境目的・目標・実施計画は
Web サイトに



環境方針Ⅰ 総合大学としての特長を活かした環境教育・研究				
対象部門	環境目的	2024年度環境目標	主な取り組み	達成度
一般教育・研究部門 /実験系教育・研究 部門	大学・大学院における環境教育・研究を推進し、学内における環境関係の教育・研究を充実させる。	環境に関する教育・研究機会を維持し、増加させ、また学内での環境教育の状況について、情報公開を行う。	・環境関連科目：618科目（前年度比-20） 未達成理由）教員の定年退職に伴い一部科目が閉講となったため。 ・環境関連書籍：5,585冊（前年度比-7） 未達成理由）汚損や重複、内容が古くなった資料を削除したため。 ・環境関連科目の情報をHPで公開 ・附属図書館における環境関連書籍の貸出促進	△
附属学校部門	附属中学校・小学校・幼稚園における自主的な環境教育プログラムを充実させる。	附属中学校・小学校・幼稚園における自主的な環境教育プログラムの継続と発展を図る。	各学校において、環境教育プログラムの継続	○

環境方針Ⅱ 環境負荷の少ない緑豊かなキャンパスづくり				
対象部門	環境目的	2024年度環境目標	主な取り組み	達成度
共通事項	用紙類の使用量を今後3年間にわたり年平均で1%以上削減する。	用紙類の使用量を前年度比で1%以上削減する。	・紙類の使用削減 購入量前年度比 93.2% (A4換算)	○
	用紙類の再利用・分別・回収を定着させる。	用紙類の再利用・分別・回収をキャンパス全体に浸透させる。	・用紙類の分別回収、裏紙利用の励行 ・ミックス古紙回収システムの継続実施 ・リサイクルボックス等の継続設置	○
	水の使用量を今後3年間にわたり年平均で原単位1%以上削減する。	水の使用量を前年比で原単位1%以上削減することに努める。	・水資源の使用削減 投入量前年度比 91.7% ・節水型設備の導入の推進 ・節水を促すステッカーを構内に掲示 ・漏水に対する早期発見と処置の実施	○
	廃棄物分別を徹底し、3R（リデュース・リユース・リサイクル）の促進を図る。	廃棄物の分別の徹底および廃棄物の排出量を削減することに努める。	・廃棄物排出量の削減 一般廃棄物 前年度比 108.0% 未達成理由）研究室の引っ越しが多かったため 産業廃棄物 前年度比 102.9% 未達成理由）研究室内の改修や退職者の研究室整備による不用品排出のため ・レジ袋有料制度の継続実施 ・分別表示ポスターを構内に掲示 ・ペットボトルキャップ等の資源回収活動 ・古本や中古自転車などのリユース活動	△
	環境配慮型製品を優先的に購入する「グリーン購入」を大学の物品購入において推進する。	大学の物品購入において千葉大学グリーン調達方針に基づく調達を行う。	・グリーン調達方針の学内への周知を継続 ・オフィス用品等の物品およびサービス290品目の特定調達物品等における調達目標達成率ほぼ100%	○
実験系教育・研究部門	化学物質の適正な管理を行う。	化学物質の適正管理を徹底する。	・化学物質管理システム（GUCRIS）の利用 ・ホームページなどによる有害廃棄物処理手順の周知 ・基礎研修等における化学物質の適正管理方法の周知 ・不要薬品類の安全管理・廃棄促進	○
共通事項	松戸・柏の葉地区において、排水中の有害物質の濃度を定常的に低い値に下げる。	下水道排除基準を確実に遵守するための体制を整える（特に窒素、ノルマルヘキサン抽出物質、水銀等）。	・毎月下水濃度計量の自主検査を実施 ・柏の葉地区において自主点検によるノルマルヘキサンの下水排除基準の超過あり、改善済み。	△
食堂部門	廃水の浄化を促進する。	廃水の浄化のためのシステムを運用する。	・グリストラップの継続設置・定期洗浄 ・厨房機器の油分拭き取りの励行	○
	廃油の発生抑制・適正処理を行う。	廃油の発生抑制・適正処理のためのシステムを運用する。	・廃油の発生抑制（ろ過機能付きフライヤーの導入・清掃等） ・廃油適正処理のためのシステム運用（食食用油専用マニフェスト等）	○
	生ごみの発生量を抑制する。	生ごみの発生量を抑制するためのより効果的な取り組みを促進する。	・生ごみ発生量を記録・削減方法の検討 ・小盛メニューの販売・食べ残し削減 ・生ごみを乾燥させて堆肥化（西千葉）	○

物品販売部門	グリーン購入の取り組みを促進する。	グリーン購入基準適合製品の品揃えを充実させ、その情報提供を進めて積極的な選択を促す。	・グリーン購入基準適合製品の品揃えの充実、表示の明確化・情報発信、購入促進	○
	物品販売に伴う廃棄物の削減・循環利用を定着・促進させる。	物品販売に伴う廃棄物の削減・循環利用を促進する。	・生協におけるレジ袋有料化制度の継続 ・使用済みインクカートリッジ等の回収 ・米ストローの有料販売	○
	環境関連書籍に対する関心を高める。	環境関連書籍の品揃えを充実させ、その情報提供を進めて積極的な選択を促す。	・店頭において社会情勢に適した環境関連書籍の取り扱い ・環境関連書籍の啓発を実施	○
外回り部門	落ち葉・放置剪定枝の適切な処理、有効利用される量を増やす。	落ち葉の有効利用を展開する。	・落ち葉の堆肥づくり、堆肥の頒布会の実施 ・落ち葉堆肥化プロジェクト継承の体制整備	○
	構内の緑を維持・管理する。	構内の緑の適切な維持・管理の継続、水辺空間の管理方法について検討する。	・構内緑地の維持・管理、効果的な活用 ・緑化活動の促進 ・学生主体のプランター企画の実施 ・学生の実習等による管理	○
	構内の美化・清掃を進め、構内環境を適正に維持する。	定期的に構内の美化・清掃を行う。	構内巡回と清掃活動の実施	○
	放置自転車を削減し、正しい自転車利用を浸透させ、構内の駐輪環境を整備・改善する。	構内の放置自転車の撤去と発生抑制を推進。マナーの向上に向けて、必要かつ効果的な施策を進める。	・自転車ステッカーの交付 ・自転車利用マナーの啓発 ・シェアサイクル利用の促進 ・自転車回収・譲渡イベントの実施 ・歩車分離の継続 ・駐輪場案内の掲示 ・放置自転車の撤去	○
	受動喫煙防止環境の整備と喫煙対策指針を施設利用者に周知することを通じて、受動喫煙を防止する。	喫煙に関する情報を収集するとともに、受動喫煙防止対策を推進する。	・全面禁煙（西千葉・亥鼻） ・特定屋外喫煙場所を1カ所整備（松戸・柏の葉） ・喫煙マナー及び喫煙場所の周知	○

環境方針Ⅲ 学生主体の環境マネジメントシステムの構築と運用				
対象部門	環境目的	2024年度環境目標	主な取り組み	達成度
共通事項	環境ISO学生委員会を維持・発展させる。	学生委員会の活動を学内外に向けて積極的に情報発信していくとともに、学生委員会メンバーを増加させ、内部コミュニケーションを盛んにする。	・学生委員会活動への参加を基礎研修等を通じて呼びかけ、約100名の新入生が入った ・親睦を深める各種企画を実施 ・活動をX・ホームページ・プレスリリース等で広報 ・パンフレットやキャンパスエコマップの作成	○
	学生の環境意識を高める。学生による自主的な環境活動を促進させる。	環境活動を通じて学生の環境意識の向上を図る。	・ポスターやSNSでの発信 ・Chiba Winter Fesの開催 ・大学祭において環境対策を行う	○

環境方針Ⅳ 地域社会に開かれた形での環境マネジメントシステムの実施				
対象部門	環境目的	2024年度環境目標	主な取り組み	達成度
共通事項	地域社会の主体的な参加を得つつ、地域社会との交流を盛んにし、千葉大学環境ISOを広めていく。	地域社会の意見を反映させるとともに、地域社会に積極的に参加し、対外的に広報活動をする。	・環境ISO実行委員会に地域代表が参加 ・サステナビリティレポートにおいて外部の方々との意見交換会を開催 ・地域のイベントへの出展 ・地域住民向けの企画を実施 ・他大学や企業への広報活動や講演活動 ・プレスリリースの実施	○
	学内外へ情報公開を行う。	千葉大学の環境への取り組みについて学内外に情報発信を行う。	・EMSの取り組みに関して大学Webサイトに掲載 ・サステナビリティレポートを発行、公表 ・「いそちゃんだより」「環境だより」を発行 ・プレスリリースの実施 ・環境系イベント、他大学の講義、環境系会議等において取り組み発表	○
	国際的な情報発信を行うとともに留学生との交流を強化し、環境ISO活動に関する国際的な相互理解をさらに深める。	環境に関する国際的な情報発信を行い、留学生との交流を通じて相互に環境意識の向上を図る	・環境系の国際会議等に参加して取り組みを発表 ・英語による基礎研修の実施	○

環境方針Ⅴ 国立大学でトップ水準のエネルギー効率の維持				
対象部門	環境目的	2024年度環境目標	主な取り組み	達成度
共通事項	エネルギー使用量を今後3年間にわたり年平均で原単位1%以上削減する。	エネルギー使用量を前年度比で原単位1%以上削減することに努める。	・エネルギー使用量の削減 総エネルギー投入量 前年度比 101.3% 電気使用量 前年度比 101.4% 都市ガス使用量 前年度比 105.3% 未達成理由）猛暑およびキャンパスの利用者増加のため	×
			・省エネルギー大会議の開催 ・エコサポート制度を継続 ・エネルギー管理システムの運用 ・エネルギー多消費型機器の使用状況を把握 ・省エネ啓発ステッカー、ポスターの掲示 ・省エネ啓発イベントの開催 ・エアコンフィルターの清掃	○

環境会計

千葉大学は環境保全活動の取り組みに対する費用対効果を把握するために、2006 年度から環境会計に関する情報を集計して結果を公表しています。

2024 年度の環境会計

千葉大学の 2024 年度の環境保全コストは約 6.8 億円（うち投資額 3.0 億円、費用額 3.8 億円）でした。また、環境保全対策に伴う経済効果は、光熱水量の増加と単価の値上げにより、8.1 億円の増加となりました。

環境保全コスト

【単位：千円】

分類	2023年度		2024年度		主な取組内容
	投資額	費用額	投資額	費用額	
(1)事業エリア内コスト	208,157	181,560	300,282	189,011	
(1)-1 公害防止コスト	1,476	20,227	23,965	18,669	
①大気汚染防止	386	2,797	11,255	4,070	チャコールフィルター交換、空中放射線濃度測定、ばい煙測定
②水質汚濁防止	0	15,113	0	13,205	排水の水質分析、排水斜及び排水管内の清掃等
③土壌汚染防止	0	0	0	0	
④騒音防止	1,090	0	12,050	0	工事用防音パネルの設置、超低騒音工法の採用等
⑤振動防止	0	0	660	0	防振架台の設置
⑤悪臭防止	0	2,317	0	1,394	建具の水性塗料化、悪臭防止装置の設置、便所芳香剤取付等
⑥地盤沈下防止	0	0	0	0	
⑦その他の公害防止	0	0	0	0	
(1)-2 地球環境保全コスト	189,211	2,622	266,598	1,002	
①地球温暖化防止及び省エネ対策	189,211	2,135	266,598	210	高効率照明・人感センサー、内断熱・ペアガラスサッシ、全熱交換器の設置等
②オゾン層破壊防止	0	487	0	792	フロンガスの回収・適正処理
③その他の地球環境保全	0	0	0	0	自然換気窓
(1)-3 資源循環コスト	17,470	168,711	9,718	169,340	
①資源の効率的利用	17,470	0	9,718	0	節水型器具への更新等
②産業廃棄物のリサイクル等	0	1,664	0	1,815	金属くず、ペットボトル等のリサイクル
③一般廃棄物のリサイクル等	0	3,161	0	2,976	古紙・空き缶・空き瓶等のリサイクル
④産業廃棄物の処理・処分	0	124,536	0	132,462	不用品機器・廃液・感染性廃棄物等の処分
⑤一般廃棄物の処理・処分	0	29,350	0	32,087	可燃ごみ・落ち葉・厨芥等の処分
⑥その他の資源循環利用	0	0	0	0	
(2)管理活動コスト	0	126,773	0	167,109	
①環境マネジメントシステムの整備・運用	0	647	0	595	環境ISO関連各種委員会、研修、事務局等の人件費および認証(更新)、運用等
②環境情報の開示及び環境広告	0	957	0	742	環境報告書・パンフレットの作成・発送等
③環境負荷監視	0	0	0	0	定期排水分析検査
④教職員及び学生への環境教育等	0	260	0	160	内部監査員の養成、研修資料の作成等
⑤緑化、美化等の環境改善対策	0	124,910	0	165,611	構内環境美化活動、樹木の剪定管理費等
(3)社会活動コスト	0	6,406	0	23,381	
①事業所を除く緑化、美化等	0	6,406	0	23,381	樹木剪定・伐採
②環境保全団体等への寄付・支援	0	0	0	0	
③地域住民の環境活動支援等	0	0	0	0	
(4)環境損傷対応コスト	0	15	0	167	
①自然修復	0	0	0	0	
①損害賠償等	0	15	0	167	
③引当金繰入及び保険	0	0	0	0	
合計金額	208,157	314,755	300,282	379,668	

環境保全効果

【単位：物量】

分類	環境パフォーマンス指標（単位）	2023年度		2024年度	
		入出量	入出量	効果量	前年度比
(INPUT)	総エネルギー投入量（GJ）	745,380	747,575	▲2,195	+0.3%
	電気使用量（kWh）	64,951	64,329	+622	▲1.0%
	都市ガス使用量（千m ³ ）	4,038	4,215	▲177	+4.4%
	A重油使用量（kL）	23.91	27.90	▲3.99	+16.7%
	灯油使用量（kL）	42.36	28.45	+13.91	▲32.8%
	水資源投入量（千m ³ ）	446.84	430.78	+16.06	▲3.6%
	上水使用量（千m ³ ）	311.96	317.15	▲5.19	+1.7%
	地下水使用量（千m ³ ）	134.88	113.63	+21.25	▲15.8%
	化学物質 ^{※1} 投入量（t）	16.13	17.06	▲0.93	+5.8%
	用紙（A4換算）購入量（千枚）	21,608	20,064	+1,544	▲7.1%
(OUTPUT)	トイレットペーパー購入量（千ロール）	141.79	129.72	+12.07	▲8.5%
	二酸化炭素排出量（t-CO ₂ ）	36,598	36,675	▲77	+0.2%
	硫酸化合物(SO _x)排出量（t）	0.016	0.029	▲0.013	+81.3%
	下水排水量（千m ³ ）	196.52	191.35	+5.17	▲2.6%
	BOD ^{※2} 排出量（t）	27.27	26.76	+0.49	▲1.8%
	化学物質 ^{※1} 排出量・移動量（t）	15.54	16.60	▲1.06	+6.8%
	廃棄物等総排出量（t）	2,494.81	2,381.13	+113.68	▲4.6%
	廃液総排出量（kL）	45.20	47.72	▲2.52	+5.6%
	※1: PRTR法対象化学物質				
	※2: 生物化学的酸素要求量				

環境保全対策に伴う経済効果

【単位：千円】

分類	効果内容	2023年度	2024年度
収益	有価物等の売却収入額	2,570	2,683
費用 削減	光熱水費の節減額	▲1,133,261	▲815,831
	廃棄物リサイクル・処分費の節減額	0	+0
	廃液処分費の節減額	▲1,395	3
合計金額		▲1,132,086	▲813,145

【データ集計方法】

●参考ガイドライン

環境省「環境会計ガイドライン2018年版」

●算定方法

環境保全コスト

- ・上・下流コスト及び研究開発コストは集計していません。
- ・費用の中には減価償却費は含めていません。

環境保全効果

・物質収支のデータ集計方法のとおり。

環境保全対策に伴う経済効果

- ・確実な根拠に基づいた実質的效果のみ計上しています。

環境ガイドライン対応表

このサステナビリティレポートは環境省による「環境報告ガイドライン 2018 年版」に対応しています。

環境関連報告書の基本情報	該当ページ	見出し
1. 環境報告書の基本要件	0	目次（編集方針）
2. 主な実績評価指標の推移	16-20、33	脱炭素キャンパスを目指す取り組み、循環型キャンパスを目指す取り組み、物質収支、物質収支詳細データ（※）
環境報告書の記載事項	該当ページ	見出し
1. 経営責任者のコミットメント	1、2、8	千葉大学憲章、千葉大学ビジョン「YOKOTE VISION」、学長からのメッセージ、千葉大学環境・エネルギー方針、千葉大学の RE100 長期ビジョン
2. ガバナンス	9	環境マネジメントシステム (EMS) の運用
3. ステークホルダーエンゲージメントの状況	12、24-32、40	学部・大学院・附属学校での環境教育、大学による社会的な取り組み、学生活動を通じた社会的な取り組み、大学を支える事業者の取り組み、企業や団体とのパートナーシップによる取り組み、外部の方々との意見交換会
4. リスクマネジメント	9、36-37	環境マネジメントシステム (EMS) の運用、環境目的・目標と達成度評価一覧
5. ビジネスモデル	3、12-15	大学概要、学部・大学院・附属学校での環境教育、国際的なサステナビリティ教育、サステナビリティに関する最先端の研究
6. バリューチェーンマネジメント	16-20、36-37	脱炭素キャンパスを目指す取り組み、循環型キャンパスを目指す取り組み、環境目的・目標と達成度評価一覧
7. 長期ビジョン	8	千葉大学の RE100 長期ビジョン
8. 戦略	8-10	千葉大学環境・エネルギー方針、千葉大学の RE100 長期ビジョン、環境マネジメントシステム (EMS) の運用
9. 重要な環境課題の特定方法	36-37、33	環境目的・環境目標と達成度評価一覧、法規制等の遵守状況・物質収支
10. 事業者の重要な環境課題	1、8-10、33、36-38	千葉大学憲章、千葉大学ビジョン「YOKOTE VISION」、千葉大学環境・エネルギー方針、千葉大学の RE100 長期ビジョン、環境マネジメントシステム (EMS) の運用、法規制等の遵守状況・物質収支、環境目的・目標と達成度評価一覧、環境会計
主な環境課題と実績評価指標	該当ページ	見出し
1. 気候変動	16-17、33、38	脱炭素キャンパスを目指す取り組み、法規制等の遵守状況・物質収支、環境会計、物質収支詳細データ（※）
2. 水資源	16-17、33、38	脱炭素キャンパスを目指す取り組み、法規制等の遵守状況・物質収支、環境会計、物質収支詳細データ（※）
3. 生物多様性	8、21-22、32、36-37	千葉大学環境・エネルギー方針、自然共生キャンパスを目指す取り組み、企業や団体とのパートナーシップによる取り組み、環境目的・目標と達成度評価一覧
4. 資源循環	18-20、33、38	循環型キャンパスを目指す取り組み、法規制等の遵守状況・物質収支、環境会計、物質収支詳細データ（※）
5. 化学物質	23、33、38	安心安全キャンパスを目指す取り組み、法規制等の遵守状況・物質収支、環境会計、物質収支詳細データ（※）
6. 汚染予防	33、38	法規制等の遵守状況・物質収支、環境会計、物質収支詳細データ（※）

※ 物質収支詳細データはこちら

<https://www.chiba-u.ac.jp/general/approach/environment/>



外部の方々との意見交換会

サステナビリティレポートの第三者レビューとして、2025 年 8 月 29 日（金）に「外部の方々との意見交換会」を開催しました。

参加者は、株式会社ブレンセンター 代表取締役社長 平石隆生様、千葉県環境生活部環境政策課 主幹 高橋崇暢様、千葉大学教育学部附属小学校 PTA 会長 松本暢平様、千葉県立千葉女子高等学校 2 年生の藤代友萌様と小林萌七様でした。

千葉大学の環境マネジメントシステムや取り組みについて

藤代 キャンパスの緑の多さを実感し、自然共生する持続可能なキャンパスが実現されていると感じました。私の高校も古着循環プロジェクトを実施しています。地域の高校生と大学生が連携する取り組みがあるとよいと思いました。

小林 附属学校での活動のように小さい頃からの当たり前は大きくなっても継続できるので良い取り組みだと思いました。学生企画のイベントをもっと広く宣伝して、多くの地域の人を巻き込んでほしいと思います。

松本 学生委員会の多方面での活動展開に驚き、魅力と発展性を感じました。学生の皆さんが自信を持って活動する姿は、附属学校の子もたちや地域にも良い影響を与えます。レポートが活動紹介に留まってしまっているので、活動の社会的インパクトや課題にも言及されるとよいと思います。

高橋 EMS の国際認証取得と学生主体の運用体制は優れた仕組みで、こうした実践の場により次世代の人材育成につながることは環境行政に関わる立場として心強いです。今後はプラスチックごみ削減や食品ロス削減など最新の社会の関心事にアンテナを張り、活動がアップデートされるとよいと思います。また、取り組みを世界にも発信してほしいと思うとともに、環境に関心の薄い学生も巻き込んで活動することで裾野が広がっていくことにも期待しています。

平石 こうしたレポートづくりを職業としている立場から見てもレベルが高いと感じました。特に大学の EMS と実務教育を融合させた「千葉大学方式」は非常にユニークで実効性があります。学長メッセージにある“日本における多くの社会課題に対し、学生自身が問題を認識し、学び、課題解決のために行動する姿勢、企業や自治体と連携して、活動の成果を社会に還元する”は、大学のサステナビリティ活動の根幹の一つではないかと感じます。総合大学として、日本や地域の様々な課題解決に向き合っていることを強調したうえで、1つか2つのテーマに特化して取り組みをわかりやすく編集して訴求し、さらに、学生の学びについてまで描けると非常に魅力的だと思いました。

千葉大学サステナビリティレポート 2025 の原案について

藤代 写真やグラフが多くて見やすい印象ですが、もっと増やすとさらに読みやすくなると思います。



高橋 PDCA サイクルに沿って取り組み状況が伝わる工夫や、このレポートの軸である「環境・エネルギー方針」と大学全体のビジョンや憲章とのつながりを明確にすると良いと思います。



小林 高校生では興味がある人は最後まで読むかもしれませんが、そうでない人は読み疲れてしまうと思います。興味が薄い読者向けに「1 ページで要点が伝わるページ」があると良いと思います。



平石 レポートとしては取り組み内容のパフォーマンスと課題に加え、課題への対応意欲のコメントもあるとさらに訴求力が高まると思います。副題の「大地に根を張り、千の葉を未来へ」が秀逸でしたので、この副題を受けた企画があるとよいと思いました。年次性と継続性を両立させる工夫として、今年の目玉を強調したり、年次のハイライトをまとめたページを設けるなど、進捗感を出す工夫があるとさらに良いと思います。ますますのレベルアップを期待しています。



松本 取り組みを一枚の図に落とし込んだポンチ絵があると忙しい人にも理解してもらいやすいと思います。また、PDF 版の目次にしおり機能を付けたり、下線を引いて強調したり、図表にキャプションや考察を入れたりする工夫や、フォントや色使いで視認性やアクセシビリティへの配慮があると望ましいです。今後は、環境変動の要因を考慮したうえで目標の達成度を評価したり、ベンチマーク大学を導入したりするなどさらなる発展に期待しています。



編集長コメント レポートに関してたくさんの具体的なアドバイスをありがとうございました。今年度対応できるものは対応し、活動の結果と課題への言及やポンチ絵の作成などは来年度のレポートで実現させたいと思います。また、活動の内容や広報へのご指摘も真摯に受け止め、今後の取り組みの参考とさせていただきます。

編集後記

千葉大学のサステナビリティレポートは、初めて環境報告書として発行した2004年度から継続して環境ISO学生委員会が原案作成・編集作業をしています。各種環境・財務データ・記事寄稿・校正などで教職員が協力して完成します。

環境管理責任者より

倉阪秀史 大学院社会科学研究院 教授（環境管理責任者＜教員系＞）

千葉大学の環境マネジメントシステムは、2004年度の導入から20年を迎えました。この間、環境だけでなく、社会や地域、企業と連携したサステナビリティの取り組みも大きく広がり、大学としての進化を続けています。本レポートを通じて、千葉大学のさまざまな挑戦や歩みを多くの方に知っていただければ幸いです。

富田善公 施設環境部長（環境管理責任者＜事務系＞）

環境管理責任者として、本レポートの作成にご協力いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。近年では夏季の猛暑が常態化しつつあり、エネルギーを取り巻く環境は一層厳しさを増しています。そうした中、横手学長のもと、学生・教職員一丸となってEMS活動に取り組んでおります。今後もステークホルダーの皆様との連携・共創を通じて、サステナビリティ向上につながる取り組みを一層推進してまいります。

編集担当者

編集長 蛭田愛海（法政経学部3年）

環境ISO学生委員会 サステナビリティレポート2025 編集部

板垣聖莉、河辺朋樹、古賀貫太、佐藤朋、清水奏、名取美歩、堀田陸生、前橋美佑、松井惺大、山口結心、吉田優月

デザイナー 森永紗耶（融合理工学府修士1年）

編集・校正サポート 岡山咲子（国際未来教育基幹 助教）

取材・執筆等協力者（敬称略・五十音順）

教職員

秋田典子、泉康雄、小林周平、諏訪園靖、服部克巳、中込敦士、藤川大祐、増島麻里子、松浦健治郎、三島孔明、安森亮雄、横手幸太郎、環境ISO企画委員の皆様

環境ISO事務局

遠藤孝夫、岡久美、境麻美子、竹森真弓、中嶋央子

環境ISO学生委員会

新井美珈那、有村奈々花、位田満実子、大野慧、岡田歩実、小原信人、川上竣太郎、菊地美如、北澤結衣、高須駿一、田口愛理、花岡希義、羽石陽奈来、早川佳那、林大輔、深田尚杜、宮前良亮、横谷和希

一般学生

栗屋日菜、貞野寿明、清水陽斗、田中政光、中上春花、中村千博、矢尾采音

その他

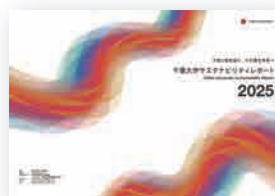
アエレカフェ、小林萌七、武田恵、築尾優実、柴崎智彦、高橋崇暢、平石隆生、藤代友萌、松本暢平

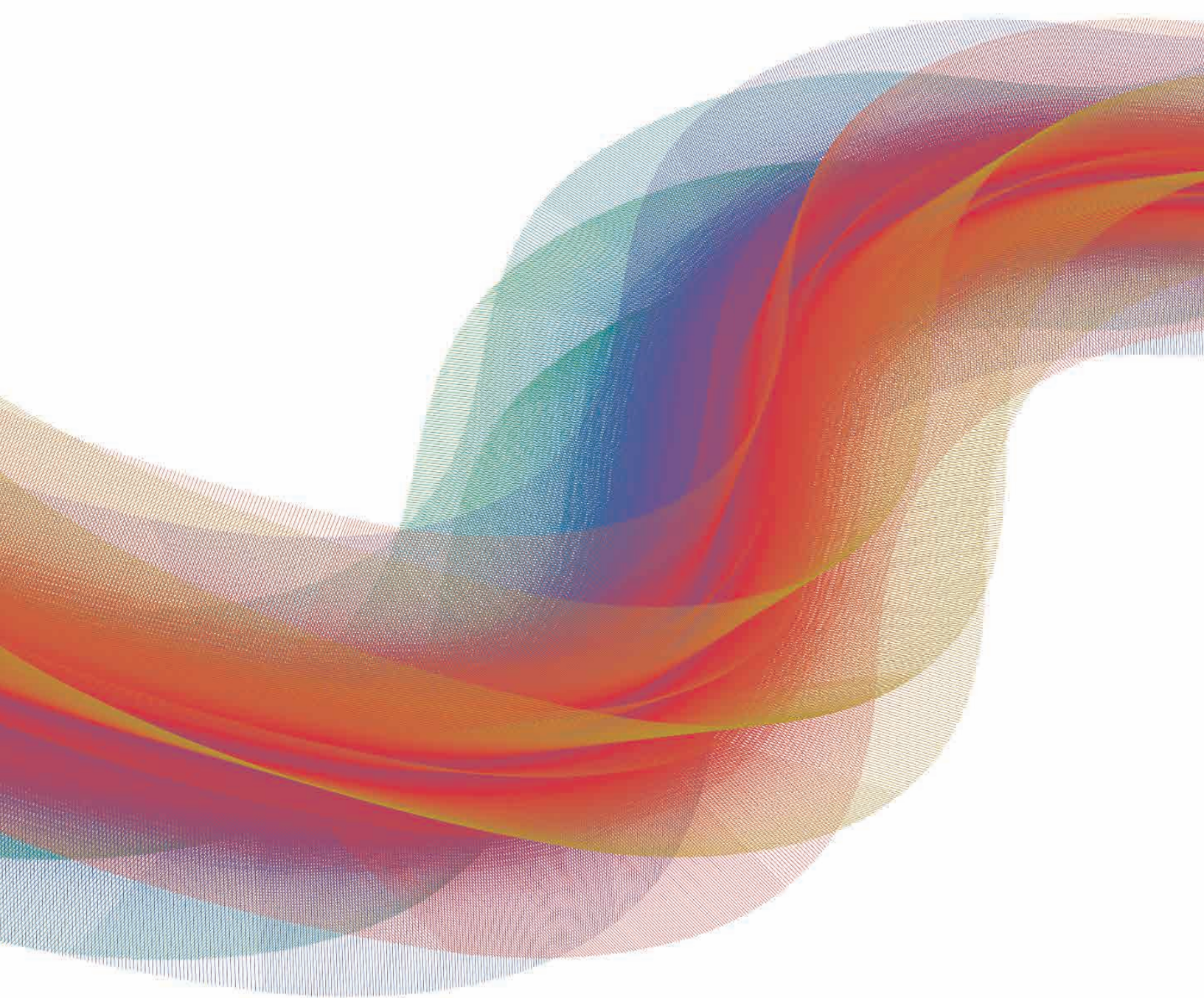
本レポートの環境配慮

本レポートはPDFでWeb公開し、印刷は必要最低限にとどめています。印刷にはFSC®認証紙や石油系溶剤を含まないノンVOCインキを使用し、環境に配慮した印刷会社に依頼しています。

本レポートのデザインと副題に込めた想い

デザインは、「YOKOTE VISION」（詳細p.1）に使われている5色の線をモチーフにして、絡み合い、同じ方向へ進みながら広がっていく姿を通して、「持続可能な社会の実現」という目標を大学全体で共有し、達成していく意思を表現しています。また、副題『大地に根を張り、千の葉を未来へ』には、YOKOTE VISIONの行動指針を体現し、大学の基盤を固め、一人ひとりを未来へ伸びる「葉」に見立て、共に行動しイノベーションを生むという想いを込めました。





発行	国立大学法人千葉大学
発行日	2025 年 9 月 30 日
お問い合わせ	千葉大学環境 ISO 事務局 〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33
TEL/FAX	043-290-3572(平日 9:00-17:00)
MAIL	kankyo-iso@office.chiba-u.jp
HP	https://kankyo-iso.chiba-u.jp

